明治二十八年六月五日發兌

女鑑

第八十七號

東京國光社

女鑑第八十七號目次

勾當內侍



婦人の任務及其の任務を完うすべき方法を明にす（三）

（は）經濟上の事務

り、

人世の事、概別して、二となすことを得べし。曰はく、勞なり。曰はく、逸なり。逸するものは樂み、勞するものは苦む。苦むものは、皇々たり。樂むものは、雍々たり。

雍々たると、皇々たるとは、勤むと、惰るとに出づ。惰るものは奢り、奢りて匱し。勤むるものは守り、守りて足る。

足りて樂むと、匱くて苦むと、いづれか、是にして、いづれか、非なるぞ。今や、わが國、新に、淸國に勝ちて、國運の盛なること、これを、前にもとむるに、殆、比なし。この盛運を、當面一時に止めずして、これを、永遠に持續し、しかも、かつ、いよ〳〵盛に、ます〳〵昌ならしめんこと、これ、實に、わが國民たるものゝ、ゆめ、忘れて怠るべからざる要務なりとす。この戰勝の光榮と、勇氣とを、永遠に保持し、さらに、これを發揮して、皇張すべき策は、他なし。また、たゞ、貨を足し、食を足し、以て、國家を富すに在るのみ。

貨食、豐足し、國家、富强なるにいたらば、文敎、ます〳〵起るべく、武備、いよ〳〵修るべし。こゝに於いてか、何等絕大の變あらんも、泰然自若として、

動かざること、山の如くなるを得べく、また、内外、宜を制することを得て、國光は、萬邦に光り、國威は、萬世に輝かん。

れもふに、國の源は、家に在り、家に在りて、内政をつかさどるものは、婦人諸子なり。婦人諸子の如きは、身は、閫外の責なしといへども、この際、あに、漫然として、等閑に過すべけんや。

約して、これを言へば、無益の奢侈を禁め、不急の冗費を節き、閑事を休め、徒勞を戒め、邊幅を飾ることあるべからず。毀譽に拘ることあるべからず。枉げて、而して求むることを勿れ、迎へて、以て求むることを勿れ。勤儉正實の業をはげみ、夙に興き、夜に寢ね、以て、身の健康と、家の慶福とを致すべし。かくして、貲をたくはへ、産をふやさば、時に臨みて、事に、難なく、内は、夫

を助けて、その志をなさしむべく、外は、仁義を行ひて、慈善の業につくすことを得ん。

（に）交際上の事務

交際は、智識を増し、藝業を磨くべき一の方法なり。愉快を増し、娯樂を加へ、事に裨して、行に補する、その利、もとより少からず。されども、交際の方法よろしからずば、たゞに、益なきのみならず、かへりて、大害を釀さんとす。財を、無用のことに費し、資を不急のわざに抛ち、閑事を習ひ、徒爲に慣れ、惡に染み、不善に陷り、醜聲聞え、臭名傳り、その禍のおよぶところ、計るべからざるものあらんとす。古より、交際を愼まずして、禍を招きしもの、勝げてかぞふべからず。應酬の間、義なく、擧止の際、禮なく、言笑を濫にし、飮

食を恣にして、小は、以て、身を敗り、名を墜し、大は、以て、世を害ひ、國を誤るもの、天下、滔々として、みな然り。あはれ、交際の愼まざるべからざること、かくの如く、まことに甚し。男女の際、乃然り。たゞ、男女の際のみならず、婦人と、婦人との際に於いても、亦、ことに、その、然るを見る。これ、婦人は、相親むこと、容易にして、相狎るゝも、亦、ことに、容易なるを以てなり。これを要するに、無益の行爲は、むしろ、止むることの善に如かず。四季をり／＼の禮節、家祥、その他、止むことを得ざる事柄ならざるよりは、みだりに、交際せざるこそよけれ。濫費、冗費の憂なく、非義、失錯の恐なく、操行虧けず、家道墜ちず、悪友、損友、卑劣不正の徒、こと／＼く、跡を絶ちて、良友、益友、正實誠直の人、ひとり、來往出入するにいたり、その益、は

なはだ大に、その利、決して少からざるものあればなり。これぞ、眞正の交際にして、眞正に、國家をなす所以なる。仰ぎて、舅姑につかへ、俯して、子女をそだて、以て、家道を正しくする道、かくの如くして、始めて足る。

論説

國力と女子教育との關係

細川潤次郎

此度、征西の大事業に於いて、皇威の赫々たる、更に、言を待ず。これ、上は、我が祖宗の御威靈と、我が天皇陛下の御威靈とに由り、下は、我が將校兵士の忠勇とに由れることとなるべし。而るに、我が輩、教育に從事する者は、教育の一事も、亦た與りて、力ある者なるべしと思へり。此の點より、更に、推

論するときは、女子の教育も、亦た、多少、關係なきに非ざるべし。俄に、之を見れば、頗、縁の遠きことながら、其の關係ありと思ふ所の事實を述べて、益、女子教育を奬勵する一口實とせんとす。

教育は、人間萬事の根源なれば、教育の盛なる國は、富强なるべく、教育の振はざる國は、貧弱なるべし。女子教育も、固より、教育の一部なる上は、其の盛不盛は、多少、其の國の强弱貧富に關係せる者なりと謂ふことを得べし。余は、今度の事件に付き、稍、感ずる所ありて、始めて、廣く、海外諸國を通覽するに、其の國の富强、十分ならず、若くは、貧弱なる國々は、必、女子教育の振はざる國々なり。概して、之を言へば、亞細亞、亞非利加の諸國は、歐米に比すれば、女子教育の振はざる所なり。而して、其の國力も、之に比例して、

稍、愧づる所ある者の如し。此の亞細亞の中に、我が日本帝國を除く。）朝鮮の如きは、近來、交通繁くして、人情、風俗も、大抵、傳聞する所なり。其の女子の境遇の如きは、尤、悲むべき者にして、教育の設備、不完全なることとは、喋々を須ゐず。支那は、大國なれども、略、同樣にして、道德上の一部分と、衣服飲食の事より外は、教育の設備あることを聞かず。印度に於いては、女子の教育、殆、なきが如く、女子にして、教育を受くる者は、一種貧家の子女、神廟の使役に供する者のみにて、此の一部は、僧侶に就き、讀書、習字、音樂、舞蹈等のことを學ぶ由なり。波斯の如きは、國、漸、西方に位し、西洋諸國の風も傳はりて、國立の學校ありと雖、女子を、學校にて教育する制あることとなし。土耳其の如きは、我が日本に勝りたる人口を有する大國にして、教育

を改良せん爲、一千八百六十九年、敎育令を發布し、其の中には、尋常小學、高等學科の爲に、男子と、女子と、各、特別の學校を創立することを得べしとあるを見るときは、女子敎育に、能く、心を用ゐざるに非ず。然れども、此の敎育令は、近日に至るまで、實施せらるゝことなしと聞くときは、女子敎育の景況は、推して知ることを得べし。又、埃及の如きは、婦女の地位高く、獨立の氣象あることと、他の東洋諸國の上に出でゝ、貿易の事までも擔當する程なれども、女子を敎育するの設あることとなしと言へり。以上は、舊國、或は、大國にして、名を知られたる國々なり。善く、其の力を開發するときは、決して、他國の凌辱を受けざるべし。然るを、今日、此等諸國の現況は、如何なりやと曰へば、實に、憫むべきの甚しき者なり。朝鮮、支那の、政治、風俗の如きは、

諸子の聞ける所の如し。其の我が國に比して、兵力の劣等に位することは、又、諸子の聞ける所の如し。印度は、英國の軛を脫することを得ず。波斯も、從來、强國なりしかども、今は、衰頽して、僅に、其の疆域を保全するに過ぎず。土耳其は、其の昔、强盛なりしかども、近世に至り、國力衰頽して、僅に、歐洲各國の保護に由り、亡滅を免かるゝに過ぎず。塞爾維、埃及等の屬國も、追々、不羈獨立となり、歐洲諸强國の鉗制を受けて、何事も、自、主張すること能はず。原來、此の國は、英領印度と、魯國との間に在りて、英魯二國、必爭の地たるを以て、常に、二國の爲に凌辱せられ、魯國に對しては、地を失ふこと、尤多く、現今、朝鮮の、我が日本、及、支那に於けるが如くにして、更に、之より甚しきものあり　埃及は、衰頽、尤甚しく、國債の負擔、過重にして、辨

償すること能はず。債主たる外國より、委員を設けて、其の財政を整理するに至れり。其の狀、恰も一個人の、破産せるときの如し。其の他は、推して知るべし。又、以て、女子教育の振はざる國の、貧弱を證明するに足れり。之に反して、歐米諸國の、富强を以て聞えたる國々、即、英、佛、孛、墺、露、合衆國の如きは、皆、女子教育の盛なる所なり。以て、女子教育の盛なる國の富强を證するに足れり。且、其の中に就き、細別するときは、澳國は、歐州中、女子教育の、最、盛なる國なれども、兵力の如き、他の文明國に比して、少しく遜る所あるが如く、露國は、此の諸國に比して、女子教育の、最、下等に位すべき國なれども、其の勢力は、他國の及ぶ所に非ず。此等は、恐らくは、他の事情の件隨せるに由りて、然る者にして、一概に、女子教育を、標準として、各國

富强の程度を定むべき者には非ず。

以上、述ぶる所の者は、事實に過ぎず。若、其の然る所以の理論に至りては、又、大に、講究を要するものあるべし。前にも言へる如く、教育は、人間萬事の根源なれば、教育の盛不盛は、國の盛不盛に關係すべく、又、女子教育は、教育の一部なれば、女子教育の盛なるは、教育の完全と云ふことを得べく、其の振はざるは、教育の不完全と謂ふことを得べし。教育の不完全なる國は、何事にか、欠典なきを得ず。從ひて、貧弱等の結果を生ずべし。此も、亦、大體を總括せるに過ぎず、其の詳なるに至りては、固より、一二言の、能く、盡す所に非ざるも、試に、余か見る所を以てせば、女子は、國人の、大概、半數を占むるものなれば、女子教育の盛なる國に在りては、半數の人員、農業、又、商

業に關する知識を有するを以て、男子の、農工商の業を助くることを得べく、而して、其の助くる所は、徒に、勞力を供するに止まらざるべし。勞力を供することは、女子教育不盛の國に在りても、之なきに非ずと雖、其の知識を以て、男子の業を助くることは、教育の道に由らざるべからず。此の半數の人の勞力と、知識とを以て、農工商の業に從ふと、否らざるとは、利害、瞭然として、疑なかるべし。これ國の財力に關するの大なる者に非ずや。又、女子教育の盛なる國に在りては、女子の交際、男子と、大差なきを以て、其の見聞も、亦、廣く、其の思想は、自然、國家の休戚に關し、公同心に富むことを得べく、愛國心を有することを得べし。之に反して、女子教育の振はざる國に於いては、女子は、家庭の外、絶えて、交際なく、從ひて、見聞狹く、思想の及ぶ所は、一

家一郷に止まり、公同心乏しく、愛國心なきが如くなれば、國民の半數は、有れども無きが如く、且、男子の、國事に從事する者に對し、牽制する所あるも、之を奬勵することは、殆、無かるべし。即、其の半數の人は、却りて、半數の人の力を減却する者となるべし。これ、亦、一國の兵力に關するの大なる者に非ずや。余輩は、此等の事實に付き、此等の理論を講究し、我が國一般の敎育は、言ふに及ばず、特に、女子敎育の、已に盛なるを、更に、盛ならしめ、以て、我が日本帝國を、殷富强大ならしめんこと、切望に堪へざるなり。

女子の風俗

三保松臣

束髪（承前）

或は、和服を難ずるものあり。曰はく、衛生上、害あり、曰はく、躰裁惡しと。これ、みな、讒語妄誕にして、決して、事實にあらず。そも〳〵、彼が窄服こそ、衛生上、害ありとは謂ふべけれ、その躰裁、不當とは謂ふべけれ。その價、廉にあらず。扱方、また、便よきにあらず。修繕、易からず。澣濯、なし難く、雨天泥濘には、毎に困じ、盛夏溽暑には、常に苦む。あきらかに、和服とくらべ視て、その優ならざるを知るに足れり。まして、これに伴へる帽子といひ、靴といひ、その費、また、鮮少にあらざるをや。和服は、乃、空氣をして、絶えず、皮膚に直接して、その蒸發を自由にし、血の循環をよくし、精神を爽にし、氣力を盛にし、筋骨を健にし、毛孔を洗刷して、汚物を除き、汗に汚れず、臭氣を留めず、しかも、ふたゝび、三たび、補修すべく、幾度も、洗濯すべく、

百般の穢を去りて、一切の不潔を絶ち、習ひて、常とするときは、身に於いては、健康となり、國に在りては、富强となり、その快樂、いよ〳〵多く、その幸福、ます〳〵大にして、推して、一世の風を作し、天下の俗を更ふることを能くするに足るべし。こゝを以て、これを見れば、わが和服は、道義に戻らず、しかも、衛生の理に適へり。これを以て、彼に比して、決して及ばずといふべからず。反りて、はるかに優るものありとせん。事情、止むことを得ざるものの外は、吾人、其の、斷じて、胡服を擯けて、かならず、國服を用ふべきことを勸むるに踟蹰はざるなり。

おもふに、東西、人、殊にして、俗、異なり。容貌骨格の、適、不適、もとより、すでに、止まんとして止むべからざるものあり。ゆゑに、佳人、美婦とい

へども、これを措きて、彼に傚はゞ、擧止、妥當を欠き、光容、ために減せん。佳人、美婦にして、すでに然り。以下は知るべきのみ。これを、再言すれば、和人のために、和服あり。胡人のために、胡服あり。服飾の同じからざる、もと、國體の自然に依る。その自然を存養し、ます〳〵努めて、その眞面目を發揚することの要なるは、ひとり、我のみ、然るにあらず。彼の國とても、また、然らんのみ。

婦女裝飾の上に就きて、吾人の見、かくの如し。この見、吾人のみにあらず。大方の識者も、また、定めて、同一の感あらん。彼の日本婦人にして、特別の事情あらざるに、胡服を服し、しかも、胡人と、比肩並行して、得々たるが如きは、誰か、これを見て、嫻雅優美、はた、微妙端莊といふものぞ、否、まさに、

嘔吐に禁へず、異風、太甚しといはんとす。（近來、衣服のみ、依然、國風を守り、ひとり、頭髮のみ、なほ、胡化せるもの、はなはだ多し。亦、その不倫なるを見る。）

婦人に貴ぶところのものは、敬と、禮とのみ。二者、その一を欠けば、婦德を欠き、威儀を失ひ、自然に、野卑に流れて、人、これを疎んじ、衆、これを輕んず。いはんや、その二を併せ失ふをや。

賤は、人の忌むところなり。貴は、人の欲するところなり。世の婦女子にして、その忌むところを避け、その欲するところに就かんとせば、德を修め、行を愼み、外は敬に、內は義に、以て、その身を榮らしめ、その家を起さんことを心懸くべし。

愚夫を產むも、婦人なり。賢者を出すも、婦人なり。推して、これを云へば、國

の興敗、天下の治亂、また、均しく、婦人に由る。則、世の婦人たるもの、戰戰兢々として、恐れて、また、懼れざるべけんや。

こゝに、本論を終ふるに方り、更に、數言を贅せんとす。いま、道路を往來するものを見るに、竈頭にして、印半纏を被り、裾を腰し、大黑傘を持ち、靴を穿きて行くものは、何となく憎むべし。和服して、高帽を着け、眼鏡を掛け、靴を穿き、太き洋杖を提げて、傲然、歩行するものは、何となく、物凄し。洋服して、帽子なく、下駄穿にて、辨當を携ふるものは、何となく、野卑なり。みな、近代の異風にして、識者の顰むところなりとす。たゞし、帽子あり、靴あらば、則、可なりといふにあらず。全躰、吾人は、洋服は、西洋人の服にして、東洋人の服にあらずといふものなり。奴僕賈豎の風にして、君子の風にあらず

といふものなり。尤、下賤、下司の徒は、東洋といふといへども、窄服して、勞働するを、舊來の慣習なりとす。しかれども、その服裝、木綿、麻子の類にして、形質簡易、材料廉談、たゐて、浮華綺靡の事なし。西洋の衣服はしからず。主として、毛皮、および、毛織を用ゐ、東洋風衣服の恬淡洒落なるに如かず。されば、國家の整理上、萬、止むことを得ざる外は、むしろ、洋服を用ゐざるを可とせんか。おもふに、日本人は、つねに、五穀を食ひ、漢土人は、蔬穀食中當の物を喰ひ、西洋人は、好みて、肉を喫ふ。肉を喫へば、血慾熾に、濃厚油膩の事をよろこびて、廉潔淡素の事を崇はず。穀を食へば、情淡く、氣平に、神旺し、形而上の事を好みて、形而下の事を貴ばざるなり。

あはれ、世の賢婦淑女たるもの、應に發奮して、束髮の鄙風を廢し、洋服の異

態を去り、以て、固有天然の容儀を正しうし、大に、婦道を振ひ起して、あつく、教化の本をやしなひ、國家の品位を高め、忠貞の効を擧げ、施ひて、國家を、富强文明の域に躋さんことを務めずばあるべからず。乃、夫の腰を纖にし臀を大にする俗の如きは、何ぞ、ふかく、珍とするに足らんや。（をはり）

女子處世論（二十）

三輪田眞佐子

第十九　禍を轉して福となすべし

目あるものは、必、宇内を見るならん。心あるものは、必、人生を考ふるならん。したがひて、この世を、假と觀るものもあれば、實と觀るものもあり。すなはち。孟子のごとく、人の性を、善と悟るものあり。荀卿のごとく、惡と解

するものあり。孔子のごとく、實踐躬行を旨とする聖人あり。老子のごとく、放言高論を好む道人あり。ことに、今人の間には、この問題につきて、千種萬別の議論あることならん。されど、その要とするところは、人生禍福の源を研究するに過ぎず。

今、人生に對する樣々の觀念を大別すれば、厭世派と、樂天派との二となるべし。たのれ思ふ。この惟一の世を、かく、色々に解說するは、もと、觀る人の心の種々なるに因るべしと。たとへば、人生は、沙羅雙樹の花の色に異らず。恒に、死、別、衰、癈など、悲慘の境界をはなる能はざるべし。見よ。人の生るゝ歡は、死なん哀の緒にして、咲く花の麗しきは、散らんあはれの萠なりなど考ふる人は、厭世的の人なり。之に反して、松の響、水の音を、天工

の曲とたのしみ、夏の日、いと暑しと思へば、緑蔭の樂あり。冬の日、實に興なしと思ふとき、雪ふりて、不時の花をば、枯木につく。あるは、生物の死あるは、その盛をたのしむ情を深からしめんためなりなど思ふ人は、樂天的の人なり。

されど、いかに悲まんも、人力をもて、人生無常の情態を、有常にせしむること能はざるものなれば、必竟、厭世的の人は、益なきに、みづから苦むものとこそいふべけれ。果して、益なき苦ならんか。好みて、かゝる苦をなすに及ばじ。もとより、世は、悲慘、不如意のことのみ多からんを以て、既に、道を蹈みて、享けつべき天賦の福は棄つべからず。なほ、進みて、人事をつくし、禍をうつして、福となさん覺悟、すなはち、心事を修め、厭ふべき世を、樂むべき世

になさずば、到底、能く、身を、世に處すること難からん。元來、世に立たん人は、正義を守り、困苦に勝つべきものなるを以て、恒に、悲愁に沈む人は、失望して、その任務を全うすることなかるべし。

いやしくも、世に、能く、身を處せんとねがふものは、自個一時の榮華ばかりを祈ることなかれ。虚僞は、處世の道にあらず。たゞ、誠實に、純潔に、その本分をつくし、もて、令名を、千歳につたへ、子孫長久の幸福を謀るべきなり。今日の女子は、わが國の形勢如何を視、また、將來、如何になりゆくべきかを想ひ、眞に、天下の母たるに耻ぢざるやう、子孫を育て、一家の名聲を有たざるべからず。吉田松陰先生は、わが國の偉人なり。おのれの、もとも、欽慕する人なり。この頃、先生の武教講録を讀みしに、その中に、女子の教戒ありて、字々、

句々、みな、今の世に適切なり。こゝろみに、その一句をぬけば、曰はく、現今の女子、柔順、幽閑、清苦、儉素の敎はあれども、節烈、果斷の敎に乏し。太平無事の時は、これにて餘あれども、變故の際に、貞操峻節を勵すにいたりては、未、足れりとせず。云々と、まことに、今後、立身して、完全なる女子となり、子孫長久の謀をなさんとするものは、かくの如き覺悟なかるべからず。いたづらに、學科として、樂天とか、厭世とか言ふを止めよ。人力の及ばんかぎり、困難を排し、精神を振ひ起し、國のため、家のため、はた、身のため、樂みて、人事を果せかし。村雲はれしあとの月は、いくらばく澄み渡るなり。實に、月こそ、世路の姿なれ。

史談

勾當內侍

大町桂月

國色、城を傾くとは、古より云ひたらはしたれど、國色ある者、必ずしも、褒似の如く、楊貴妃の如き人のみにはあらず。されど、詩人も、西施もし能く呉國を亡ぼさむ、越國の亡ぶる時は又是れ誰ぞとうたひけり。古來、英雄の士の、美人の爲に其の身を誤り、其の家を破り、其の國を亡ぼしたる者、いと多かり。かく英雄をして失敗せしめし美人の中には、固よりその罪ある毒婦もあれど、また清淨無垢なる淑女なきにあらず。

新田義貞公は、楠公に劣らぬ忠臣におはせり。さるに、建武の末、尊氏の敗れて西に走りし時、勾當內侍との離別を惜しみて、敢て之を追はず、遂に軍機を失ひたまひければ、後世の論者、公を目して不忠となし、且つ罪を勾當內侍に歸するものあれど、そは、義貞公にとりては甚だ酷に、勾當內侍にとりては、頗る寃なるを覺ゆ。義貞公の尊氏を追ひたまはざりしは過失なり。されど、人、聖人にあらざるよりは、

誰か過失なからむ、義貞公の前後の心事行爲を察しまつるに、不忠の跡は、いさゝかもこれなく、一たび護良親王の令旨を奉じて、逆賊高時を討たむとて、稻村が崎にいたり、寶刀を把て海に投じたまへど、馮夷も亦その赤心に感じて、潮を退けたりと傳ふ。また、その死に至るまで、猶、錦囊書を懐にしたまひしが如きは、精忠君に盡して、至誠日月を貫くものにあらずや。あはれ、その忠、その義、我が國の史上、稀に見る所なり。尊氏を追ひたまはざりし過失は、或は間接には、君に對して不忠ともならむ。されど、間接の影響まで詮索すれど、楠公が湊川の討死も、間接には、不忠なるかも知るべからず。かく、楊枝にて重箱の隅をほじるが如く、嚴密にとがめだてして、一過失を以て、直に絶代の忠臣を貶するは、忠義の心ある人の所爲とは云ふべからず。

義貞公の過失には、勾當内侍の美色も關係せざるにはあらざれど、美色いかでか罪あらむ。内侍はもと窈窕たる淑女なり。内侍の心は清淨無垢なり。決して毒婦にあらず、淫婦にあらず、また城を傾くるの哲婦にあらざることは、内侍が前後の事跡に徴して明かなり。請ふ、余をして少しく語る所あらしめよ。

井戸端の櫻あぶなし酒の醉と云ひけむ。花を折らむとて、誤て井戸の中に落つ。これ花の罪か。抑、折らむとせし醉漢の罪か。さても、勾當内侍は、藤原行房の女なり。年若き頃より召されて宮中に仕へぬ。その姿、楊柳の春風になびくよりも嫋娜に、その顔、蓮花の秋水を出づるよりも麗はしきばかりの美人なるに、花前に歌を咏じ、月下に琴を彈ずるなど、風流たるわざにも、いと堪能なる才女なりければ、君の御覺も、とりわきてめでたかりけり。

九重の奥にも秋颸たちて、御前の眞萩、今を盛りと咲き出でし頃、雁が音わたる宵の空に、月の光のいとさやかなれど、内侍、堪へかねて、珠簾なかば捲き上げて、ひとり玉琴かきならしけるに、折しも、警固に召されて、宮中に伺候せられたる義貞公、その妙なる爪音に心うごき、はからずも、その麗はしき姿を垣間見て心にはかに惑ひたまひ、流石に鬼をも挫くべき、英雄の鐵石の腸、忽ち綿よりもやわらかくなりぬ。

新田左中將とも呼ばるゝ當代第一の武士の、思のたけを寄せたる玉章の數々、机の上に山をなすばかりなれど、内侍、手にだに取らずして、唯つれなくのみ過せり。そ

は、左中將を嫌ふにあらず、君に仕ふる身の、女の正しき道をぞ、つゆ踏みたがへじと思へるなりけり。これを以て見るも、内侍の毒婦にあらず、淫婦にもあらずして、清淨無垢の淑女なりしことは、推して知らるゝなり。

御門には、此事聞かして、いとゞ哀れにおぼしめされ、左中將を召して、御盃たまひけるついでに、肴にとて、勾當の内侍を賜はりけり。この年月をろらにおこがれし、左中將の心の中のうれしさは、如何なりけむ。もとより誘ふ水には落花の情に堪へざりし内侍も、思の外なる君の御情を仰ぎて、今更に身を措く處を知らず、思ひ思はれし、英雄と佳人との奇縁空しからずして、今は涙より外に、言葉なきもことわりなり。」

東魚一たびは、西鳥を喰ひつくしたれど、獮猴の如きもののあらはれて、世は再び亂れ、いたはしや、官軍の旗色次第に惡く、時、利あらずして、騅逝かざれど、虞氏の涙も今は何かせむ。左中將、今は止むを得ず、去ぞし、北國にしのびて、再び江東の子弟を集め、地を捲きて重ねて來らむとて、坂本まで落ち行かれけるが、もとより飽きも飽かれもせぬ中なれど、かよわき女の身にて行路の艱難を冒して遠く落ちゆかむこと、思ひもよらざれど、勾當内侍をぞ、今堅田といふ處にとゞめ置かれけり。雲

の上に侍りし上臈の、あれに荒れたる、海人の苫屋に身を寄せて、風雨をふせぎ兼ぬるだに、果敢なき身の上なるに、最愛の夫には生別れて、その行方を知らず、君は吉野の行宮に天下をせめたまふと聞くのみにて、都には豺狼路に横はれるに、左中將に縁故ある身なれど、今日や捕はれむ、明日やさがし出されむなど、獨り心を痛むる内侍の身の上、思ひやるだに涙なり。

かくて、その翌年の春には、内侍の父、行房朝臣、金崎といふ處にて、敢なく討たれたまひきと、風のたよりに聞えけるに、さらでだに露けかりける内侍の袖、今は瀧なすばかりにて、我が身も共にと歎かれけるが、良人に先きだちて死なむもさすがにと、果敢なき命ながらへて、朝暮、北の空をのみ眺めけるに、その年の春も流水と逝き、秋も石火と過ぎ、三年目の秋になりて、漸く左中將よりの音信あり。年頃御身を迎へむとて、苦心しけるに、其の機なくて、今にいたりけるが、この頃、やうやく落ちつきたれば、迎の人をまゐらするほどに、疾く〳〵來りたまへとなり。内侍は、優曇華の春待ち得たる心地して、輿を飛して杣山まで來りければ、はや、左中將は足羽に出立ちたまへりと聞きて、またもや、足羽に向ひけるに、淺津の橋に

て、瓜生彈正左衛門といふ士の、百餘騎を率ゐて歸り來るに逢ひぬ。瓜生、内侍を見て、馬より下り、新田殿は御運拙なく、昨日の暮に、足羽といふ處にて、敢なく討たれたまひぬと申しければ、内侍は唯夢かとのみあきれまどひ、輿の中に伏し沈みて、身も浮くばかり泣きかなしみぬ。せめては、討たれたまひし處にゆきて、亡骸だに見奉らむと思へど、敵、味方、入り亂れたれば、心に任かせず、さればとて、左中將の年頃こもりたまひし、杣山の城に中陰の喪にこもらんとするに、はや敵軍寄せ來て、こゝも修羅の巷となりければ、これもまたかなはず、よく／＼果敢なき身の上とあきらめ、なく／＼送られて京都に歸り、さゝやかなる菴を結びてあるに、甲斐なき露の身を寄せけるが、ある時、都の大路にいでけるに、人、多く集りて哭く聲す。何事にかとて、立寄れば、こはそも如何に、さきに遙々たづねゆきて、え逢はざりし左中將の首の、空しく怒を含みて、獄門にかゝれるなりけり。内侍一目見るより、わつとばかりに泣き倒れ、物も覺えず、日の暮るゝまで伏し沈みけり。いつまで歎きたればとて、涙は九泉の底に入らず、此の上は、後世の冥福を弔ふよりは外なしと、をゝしくも心とり直して、綠の黑髮をそりおとし、嵯峨の奧の草菴に行ひす

ましけるとかや。あはれ、内侍は尼となりたれど、浮屠氏に淫するにはあらず、唯、夫の冥福を修めむとてなり。かくまであはれなる境遇に處して、正しき女の道を遂げしを見ても、世に稀なる貞烈の美人にして、決して哲婦にはあらざることを知りうべきなり。

今、西京の西なる嵯峨二尊院の側に、新田義貞公の首塚と呼ばるゝ塚あり。こは、義貞公の首の梟せられし時、勾當内侍、ひそかに奪ひて、そを葬りたる處なりと云ひ傳ふ。相摸の網一色村にも、義貞公の首塚と呼ばるゝものあり。その塚、酒勾川の側なる民家の裏にあり、高さ一尺ばかりなる石塔立てり。此の塚につきては、二說あり、其の一說は、義貞公の臣船田入道なるもの、公の首を奪ひとり、遁れ來りて、此の地に埋めたりと云ひ、他の一說は、宇都宮泰藤なるもの、公の首を得て、公の故郷新田に持ち行きて葬らむとて、此處まで來りけるが、病にかゝりて、自から起つ能はざるを知り、命じて首を玆に埋めしめ、その身も尋いで死せりといふ。義貞公は京都に埋められたるか、はた、相摸に埋められたるか、未だ孰れの是なるかを知らず。とにかくに、惜みてもかなしむべきは、精忠無双なる義貞公の末路にして、い

たゞに餘りあるものは、薄命なる美人勾當內侍の身の上なりけり。

玉苗

大隈松子

山州嵯峨野の近傍りに、秦何某といふ者あり。元はよしある武士なりしが、浮世を遁れて、此所に隠れ、妻を娶りて、一子を擧げ、名を傳三と稱ねけり。さるに、常なき世の習ひ、とて何某は、不圖疾に犯され。頃は、弘仁某の歳、秋風寒く身に染みて、梧桐の上に置く露の命はかなく散りにけり。殘るは妻と子のみにて、妻はまだ廿三歳、尚うら若き身なれども、心様最清く、甲斐〴〵しくも今年五歳の傳三を養育、近隣の者共、切に再嫁せよと勸むるを堅く辭ひ、唯一向紡績機織業をいそしみはげみ、はた佛を吊ふ外絶ねて餘念もなかりしに。實に、光陰は梭の如く、今日は昨日、今年は去年と、經るともなく明し消光て、いつか十餘年を過來つゝ、傳三、既に、十九歳、はや一箇の丈夫となりぬ。されど、極めて孝行者にて、母に奉養怠らず、諸方に雇はれ、傭書して、其日〳〵を送りしが、或時、母傳三にいふやうは、其方が力にて、妾迄餓を覺ねず生活すこと、淺からず思へども、さはあれ、其方一

人にのみ勞させんは心なし。只速く婦を迎ゑ、夫婦ともに職をなして、生活を立つるぞ便宜なる。妾は寡婦にて難なきも、其方の後なきは不孝なり。かたく\／、早く心を定めて然るべき婦を迎へよ。とは云ひながら、此の貧苦、誰が喜びて嫁入らせむ。思へぞつらき浮世かな、と聞く傳三は、感謝に堪へず、膝に滴る涙をも拭もやらで、頓首拜し、平常ならぬ母御の恩何時の世にかは忘れ奉るべき。さは然乍ら母御を養ひまゐらすることは、己れ兎も角もして仕課すべし。婦を娶ることのみは、今暫し待ちてたべ。又婦を得たりとても、御心に應はぬときは、反て不孝となりなむか。此邊よく\／御思案ありて、小子の上氣遣はず、御心安くをはせかしと、例にかはらぬ孝行心、其の孝行のめでたきを、母はいたくも喜べども、心は尙もすまされど、是非に嫁を求めんとて、一日齋戒沐浴して、亡夫の位牌に向ひ、涙を流していひけるは、妾節義を守ること既に十餘年に及び、聊も他し心を持つことなきは、神靈知召し給はめ。なれど、今止むことなくて、一の所願を白さむとす。神靈明に鑑みて、占に因りて正かに告させたまへてよ。ゐは妾節を守りて寡にて身終るか、又改めて嫁すべきかの二つの一に侍るなり。再嫁は望に侍らねど、如し許したまふこ

とならば、此身を鬻ぎて金に代へ、其の料をもて、傳三に嫁を娶らせむ所存なり。是全く夫の御爲、家の爲、孝子を助る神占偏に昭臨あらせられ、あからさまに示してよ。と、信を凝して祈念しつ、錢を抛てトふに、果して改め嫁する占にぞ中りける。されど萬一のこともやと、再度トひしに、亦同じ占なりければ、今はと心中落着して、密に人を頼み、妾の口を求めしに、諸人固より其の貞實なるが上に、其の容色さへ美麗なるを知るを以て、諸方より、之を得むと、言ひ入るもの、多かりき。傳三熟々見聞して深く悲み、涙を揮ひ、小子の孝養不足とて、今までの貞節を、空しくしたまふことの口惜さよ。と嘆きければ、母は頷き、其方が詞道理なり。しかし、妾が再嫁するは、深き志のあることとなるを、強ちに抑止ろと喩し。即て近き傍の藤太夫といふ富家の妾となりてける。此の藤太夫元篤實の性質にて、其の行も吝嗇ならず。親族も多く、奴婢も少からず召使ひて、家業繁昌したれども、曩に妻に死別れ、久しく鰥にて居り。萬事便なきまゝ、今彼の女を入れて妾とはなせしなり。此の時支度料として、銀三百両を與へけるが、母其の銀を受けて、箱に納れ、錠を閉ぢ。鍵を傳三に授けていへらく、妾六十日の後かならず歸りて、其方の婚儀を整ふ

べし。其迄此の銀箱は母が預り、鍵は、其方管置るべし。傳三いふ、小子此の銀を得むやうなし。鍵も、母御持ちてれはせよ。否然はあらじ、切にと、種々に説諭し。遂に別れて出往きぬ。かくて藤太夫の方に到りて後妻となりしが、元來賢き者なれど、下々迄も拔目なく、心を注て撫勞はり、一門の人々其の餘をも、誠をつくしてねんごろにもてなせしかど、衆皆感じ、且重じ、寔にかの人の妻なりけりと、大方ならずもてはやしぬ。さて兩月も過ぎしにぞ、やがて藤太夫に、事の次第爾々なりと打明し、然樣の理故、暫し暇を賜はり、家に往きて事を調へてむといふ。藤太夫も甚感じ、幸、梅津の里に喜内と呼べる百姓あり。生來至りて正直にて、我が年來の碁敵なり。一人の娘を持ち、玉苗といひて今年十七歳、容色すぐれ、心立みやびたり。我れ媒妁して婚姻させむはいかにと問ふ。實に上なき幸福なれど、よろしく計りてよと、相談忽ち調ひ。直に喜内の方へ言入れしに、一議に及ばず、頓に承引し。遂に相約して、吉日を撰み、女を傳三に嫁せしめける。此の時母は、彼の豫て預り置きし銀を持ち來りて、傳三に與へ。婚禮儀式形の如く、めでたく事を終きとなむ。然るに傳三は、玉苗を妻として、いと甚愛すと雖、之を久しふして、遂に一度も、衾

を共にせしことなかりしかど、妻は、本意なく、半年ばかりを過ぎ、或夜からうと心を決めて、夫に向ひ、君の妾を愛憐したまふ眞情は、寔に勝れぬ喜びに侍れども、數の月日を空に過ごし、衾を共にしたまはぬ御心ころ覺束なけれ、願くは、事の由を包まず語り聞ねて、妾が惑を解きてよと、いひかけつゝも、押拭ふ、睫に餘る憂思ひ、忍びがたきは涙なり。傳三數次打首肯き、偁の詞實に尤なり。偁が氣立の美しく、擧動の雅びなる、怎で疎に思ふべき。只此に、我が心に、思ひ難む一事あり。ろは云々の故なりきと、母の身實の始末を語り。かくまで深き思入を、無下に辭ふは恐しと、枉て母御の御詞に從ひて、かくは偁を迎へ取り、夫婦といふも名のみなる、まろねの床の夜半の夢、結びもあへぬ吾妹子の、此の世の緣し薄くとも、契り盡ずぞ、後の世に、生れ換りなり代り、厚き情に報はなむ。身代銀を還して後は、眞の婦よ、夫よと、いひもしつ、いはれもせむと豫てより、念ひしことは空頼め、三百兩といふ莫大の銀、二年三年勞力れども、償はむこと思ひもよらず。あゝ我ながら不注意きと、頻りに今はなやめども、及ぬ悔をいかがはせん。兎さま角さま思ひ詫び、心ともなく昨日とたち、今日とくらして飛鳥川、流も早き半歳餘り、よしなく

物を思はせしは、みな吾儕が過失なり。容捨してたべと。只管に、己を責つ、身を羞つ、言ふに甲斐なき貧しさを、口惜む心の切なきを、見るに見かね。玉苗は、瀧つなみだせきあへず、ゑむし詞もなかりけり。

(未完)

漫錄

敎訓及び感化と女性

中尾鶯夢

呱々の聲を放ちだる嬰兒は、物心着きしより、目に映り耳に觸るゝ森羅万象に、智識の潺々たる流をして、末遂に音凄まじく岩根を嚙むの、波濤たらしむ。是や人生の穩る靜けき潮路なりける。されど水の低に就く路すがら、龍潜む壑、鰐沈む潭なからんやは。瘴烟鎖し蠻風吹き荒むの際、漠たる心腸は、必ず惡魔の拿ふる所となる。誰か謂ふ、感化と敎訓の要なしと。

感化と敎訓、固より是れ別問題なり。敎訓するもの、必らず感化力ありと限るべからず、感化力あるもの、必らず敎訓すとは斷ずべからず。憶へ、仇氣無き兒童に對して、道德を釋き、脩身を談ずる者、明快なる說、的確なる例、流暢なる辨、懇篤なる談を以てす。是れ兒童を敎訓するに於て、一

も間然すべきなし。故に兒童を感化したりと、謂ふを得べきか。識らず玆に、其解くところ晦懶、其授くところ浮薄、澁滯の辨、以て生徒に對するの師あり。其語るところ平々凡々、更に一も奇とするに足るの點なし。然れども唯何となく、藹然たる和氣に吹かれ、森然たる松柏に對ふ如く、對談者をして、膝の前むを覺えざらしむるものあり。是人を敎訓する學識には乏しきも、人を感化するの力の、豐かに富めるものならずや。

敎訓と感化とは、幾たびか少壯有爲の敎育者をして、誤り迷はしめき。曰く、敎訓は是れ感化なりと。然り敎訓も亦感化と、均一の働を現はす無きにしも非ず。さはれ、敎訓は理性を啓き、感化は德性を涵ふ。智識あるもの、必ず德備はるに非ず、德孤ならざるもの必ず智識ありとすべからず。今の師弟の關係、多くは儼然たる儀式上に止まり、精神は依然として他人なり。其の利害は毫も相關せず、其の痛痒更に相連らざるの狀、韜として忱に嘆すべし。此の時に於てか、敎訓の効或は存せん、感化の績に到りては、斷じて無し。

疇昔ペスタロッヂ、敝れし衣、蓬たるの頭、白屋の裡に子弟を諭う、渠は子弟の敎師たらんより、寧ろ好伴侶なりしなり。凍其苦を與にし、樂其歡を偕ふす、朝は倶に口嗽ぎ、夜は床を同ふせり。而して渠が少年子弟に及ぼしたる、感化の妙は奈何。十九世紀に於ける敎育史が示す如く、渠は確かに、精神界の光明たりしなり。渠は子弟を感化したりと謂ふよりも、更に一歩を進めて、渠厥れ

自身が、少年の頭腦に遷り変りて、鐵筆もて其の頭骨に、自巳を刻銘したるなり、と謂ふの適切なるを覺ふる程なりき。故に一人のペスタロッチは、分れて百のペスタロッチとなり、千のペスタロッチとなりて、永に、其敎育主義の妙締を、地の隅までも傳へたり。嗚呼之や眞に一感化の績、遙かに敎訓の上に聳ゆるを證せる、活ける事實にあらずや。

我現世に於けるペスタロッチ、抑も誰とかなす。深窓に籠りて、書見に眼を曝さるゝ姫御前、或は孤燈に對して、苧紡むぐ賤の女、二三を相手に、家政を司り給ふ夫人、皆之我國のペスタロッチ、其の艶めける言葉、嫋々なる擧動、死せずして活けるにあり、腐敗せずして健全なるにあり。女性の天禀は、蓋し纖麗優美なる質に、感化の妙なる力を、罩め懷くなり。其の鋭さは莫邪の劒も、之を較へたらんには、鉛刀にも視ゆべし。其の一國に通有せる理想の、陶汰影響を蒙るは、與つて妙齡なる淑女が、密かに研ぎ琢ける、感化の力に由るは、斷言して憚からざるなり。

聞説らく、英國の現今、渾圓球上海面の覇權を、掌に握りて、優に歐州の諸强國を睥睨するもの、止だ妙齢婦人の愛らしき秋波、恒に逞しく勇ましき武夫の、心裡最奥の誠心を、射照しつゝ在るを以てなりと。

借問す我二千万の窈窕たる淑女諸子、果して此の覺悟あるや否や、欣慕する男子の愛に、管理する家庭の情に、悟り給はずや、將來に於ける我國運

の隆衰泰否は、柔弱き淑女が、驚ろくべき感化の靈力を含める、愛の傾き瀉く方向に、隨ひ連なるを。

今や皇帝の振々たる　大御仁は、天地の如く、危に傾き瀕れる韓國を恤ひ給ひ　皇帝の赫灼たる稜威は、雷霆の如く、頑冥不靈なる清國をも撃たせ給ふ。今後の風雲如何に變じ來るやは、豫じめ測り知るべからじ、されど歐米諸國に、東洋の最強國たるを、認め識られたるは、掩ふべからぬ事實なれ。人は常に謳ふ、外は燦爛として美なるも、内渾沌として虛ならむ、國辱之に若かじと。故をもて謹みて、我齊々たる淑女に望む。汝が忠君の一端として、腸抉りなす口唇に、愛國の情を吹鼓し、報國の萬一として、心恍かしなす纖手に、海國の思想を鼓舞しねかし。いつか年月の經めぐりて、我大和武勇の譽、いや昂く。赤髯漢も頭を垂れ腰を折り、碧眼奴も尻に伏して用を辨ずるの曉、淑女諸子の地位はいかならん。今より想ひ定めつゝ、心の臍を固め給へかし、機は乘ずべくして逸すべからず。思ふべく省るべし。

水難翁（二）

橘舍主人　横井知萬多

（四）無慘の雛

庭はよく月清し、いざ船出せむと、悟太郎は眞帆わげさせ、追風に走しる船は矢を射る如くなるに、「かの水難狂人に見せたきものかな」など獨言つつ、いよ〱ゆき〱て、はや金華山も程ちかくな

りぬ。「皆のもの湊入も今一息ぞ」などよろこびあへる折しもあれ、何處よりよせ來にけむ、雷のごとく一艘の舟よせ來ぬとおもへる内、早舳の上に黒裝束したる十人ばかりの怪しき男突立てり。こはいかに、海賊よ々々と船の片隅より叫びぬ。悟太郎はいと物なれたる故にや、船舘の燈火ふきけし、やをら這ひ出てゝうかゞひ見れば、三尺の秋水月にきらめきて物凄し。「こは大事なり」と、又這ひ入らむとするを、賊は目ばやく見つけて引捕へ、「汝はこの船主か。」「いや私は水夫でござります。」「僞いふな、いかにいふとも逃れぬ處。」「いや決して船主では、」「何をえらぐ〱しい、船主と水夫との見わけがつかぬやうなことで、海の働が出來るかたわけめ。それともいふが定ならば、船主の所へ案内せい。」といきまけば、「いや私は便乘しましたものでござります。」「何をつべこべとほざきやがる、ぐづ〱いはずと」と、晝夜燈さしむけてめくばせすれば、一人の賊矢庭に綱にて高手小手に縛しめぬ。「さあ持金すつかり出せ、」「いや前申す通り、いかにお責めなさるとも、決して存じませぬ。」「うぬ强情野郎」といふより早く、目より火も出でむ斗り、頰のあたりをはげしくうちぬ。うたれてもいよ〱默していはず。水夫らはたゞこゝのすみにかくれ、かしこのひまにひそみ、物音もせず。賊等は手々に目ぼしきもの何くれのわかちなく、みな奪ひとりてわが船にのせつれど、遂に金子は得る處なきに、いよ〱責め問ふ。いよいよ責むること甚しくなりて、いよ〱いはず。

賊はいよ〳〵いかりて、「この口が〳〵」と、白刄にて唇きりさきければ、流るゝ鮮血、足にさへ傳はりてなまぐさし。さてもなほあき足らでや、白波の又たちかへり、錨にまかとまどりおき、櫓拍子ろろへ鼻歌うたひつゝ、波に沒して影もとゞめずなりぬ。水夫らはたゞ〳〵逭ひよりて見れど、あはれ無慘、船主は早く人事を辨へず。驚きていろぎ縛をとき、とかくに介抱して、とまれ角まれ湊まではと、帆を見れど、物の益にたゝぬ吊にさきやぶられつ。こはいかにと、櫓のもとによりて漕がむとすれど、櫓杭はいつのまにか斬りさられ、風の力をからむにもよしなく、腕の力はた用ゐるべき道なきに、水夫等たゞ呆れに呆れて、船ばたに立てり。

（五）　風波の災

海靈はあやしきものか。今まで鏡のごとくなりし空は、いつしか跡もなく、墨より黒き雲の簇りたこり、月光爲めにればはれ、風ふきたちて、船は渦の如くまひはじめ、九天の空に舞ひ上ると見れど、奈落の底に陷り、東西南北、いづれをいづれと一寸先だに見わかむよしもなきに至りぬ。あはれ櫓はあれども、あつべき抗なく、檣は存すれども、はるべき帆なきをいかにせむ。まして九死に臨める悟太郎あり。水夫等は只一心に、金刀比羅の大神を默禱してありしが、遂には南無金刀比羅さま南無金刀比羅さまと續けさまに禱る、ろの聲波にひゞきて、物すごさいはむかたなし。風はいよいよはげしく、波はいよ〳〵怒りて、船はさながら

颶前の木葉のごとくなり、いかに物馴れし水夫らも、今は目もくれ心もきゑて、たゞ船のくだくるを待てるが如し。

海上俄かに風波の荒れ出しければ、渡波救難所にては、見張一きはきびしく、所長濱邊千濤を始め、悉く出集ひて、勞力水夫は救助船をしたて、すはといはゞ漕出むとかゝりにして、救助具などとりどりに装へり。皎々たる月光影きゑて、うたゝ物すごくのみなりゆくに、轟然一發空にひらめくは、難破船ありとの信號なり。號角はなりいでぬ。組長は船員を指揮して、第一救助船は、八挺櫂の勢、あれにあれたる、波濤をしらざるもの丶如く、副組長の指揮せる第二救助船其の後につぎ、第三第四と、いと勇ましく漕ぎ出せり。遭難船はます〳〵漂ひて、こなたざまに流れくる折しもあれ、見張所の樓上より、闇をぬひて走る一個の流星、あやまたず船の中に綱をたくれり。されどあるにかひなき、船員が船には、こははやく無効なりき。幾多の救助船は、發射機のすゝみし方を、しるべにすゝみゆきつれど、恰も盲目の旅のごとく、いづくをあてと見わかむよしもなし。こゝに第一船より、海中に投げ入れたる救命焰より熾に噴火して、十方海里さながら晝の如し。ろこぞと一聲、早く救助船は四方にめぐりて、いちはやく船中にのりうつれど、皆はや死の關門に近づきて、漸く一縷の蟲の息あるのみ。

（六）　ひろひし生命

悟太郎は夢のさめたる如く目をひらきて、いと怪

しげに、まづ室の周圍を見まはしぬ。妻と娘とは淚の中に微笑みて「あなた氣がおつきなさいましたか」といふ。聲こそわづかに聞ゆるばかりなれど、歡喜の心はたしかにあらはれたり。苦しき中に、今はじめて氣のつきたる如く「おゝ末か、雛もゐるか」といぶかしげにいひぬ。「さるにてもこゝは何處ぞ」とゝへど、妻は傍近く進みよりて、「海賊のためあなたのお怪我なされしことは、水夫らよりきゝてしりましたが、其の後は風や波が俄かにあれまして、水夫らもみな氣を失ひ、實に危ない處であつたを、濱邊さま始め、救難所の方々のお陰で、救はれましたことを、すぐ電報でしらしてくれましたから、取るものもとりあへず、車でまゐりましたが、何をいふにも三十里以上の道のり、心はかりは先にたちましても、車屋とてさう走れるものではなし、やうやく翌日の晝頃に、渡波について見ましたら、外のものはみな氣がついてをりましたれど、あなた計は、普通の手當では中々とゞかぬと見え、まだお氣がつかれぬとて、救助水夫の女房らは、体温をもて暖むるほかはないとて、わが子の病氣を看護するやうにしてをりましたが、二時間ほどもして、おひ〳〵温まりが出來てきましたゆゑ、釣臺へのせてこゝへ」といふも、やう〳〵聲くもりゆきぬ。「さてもこゝは何處ぞ」と問へど「こゝは石卷病院です。今まで濱邊さんもお出でしたが、近々仙臺で水難救濟會の總會があるので、忙しいからといふて、今お歸りになりました」といへど、悟太郎はたゞ呆然として、靑ざめ

たる頬の上に涙は玉のごとく傳へるに、ぬぐはむともせず、「あゝわるかつた。」

後十日を經て、仙臺の公園の四方に幔幕をはりわたし、水難救濟會の總會は盛んに行はれ、總裁宮殿下も御臨場ありとて、町内上を下へとのゝしりあひぬ。式場につらねたる寄贈品いとさはなりし中に、墨黒々といたく人目をひきたるは、夢野悟太郎寄贈としるしたる札の下に、海産物山の如く、且錨一挺をそへたるにてありける。この日悟太郎は、病後になやめる身を妻と娘とにたすけられ、前後には持船の水夫ら三十人斗りとりかこみて、胸にはことごとく會員の徽章を帯ひて、席場に出でたり。いと笑ましげに出迎ふる千濤を見て、妻と娘とは早涙ぐめり。悟太郎はまゝならぬ身を強ひて進めて、千濤の手をとりてかたく握りぬ。再生の恩を感謝せる意、胸にあふるれど、詞はいでず。たゞきく、瀧のごとき涙、巖の如くかたく握りたる兩人の手に、はらはらとこぼれおちてくだくる音。

技藝につきてのはなし

田邊和氣子

世にはかたはし斗り知りたる事を、ほこりかにもてなす人あるころ、かたはらいたけれ。そもわづかなる技藝だに、先づ其道にいりて、三年はおこたりなく學びて、稍其理をしるもの也。かくて後又、おのれと工夫し、おのれとみがきて、許しの書物を受けざれば、此道知りたるとはいひがたし。

ろも技藝あまたある中にも、許しの多きは、茶儀、花挿にぞあなる。其他の藝は、わづかに一度、または二度ぞかりなり。さても茶道は、薄茶、濃茶、夏冬の點前を始とし、くさ〴〵の器により、種々の棚により、事變りたる茶室により、其點前、其取扱ひの差あることを、知りたるをぞ、一通りとやいはむ。さて其上に、十三ヶ條の小習ひ、といふ許しあり。これらをよく學びて、會席の主客の事を心得て、熟練したるを、可なりの知り人ともいふべし、猶其うへに、茶通箱、唐物點。臺天目、盆點、などいふ四度の傳授あり。これらを熟練して、亂れ、にたよびしころ、茶の師とも宗匠ともいふなり。挿花も、他流はさしもあらねど、池坊流は、先づ三年斗り學びて後、三船、松竹梅、實物、葉物、などいふ。五度の許しあり、さる後。皆通ならぬ草木の、七種傳あり。これをよく學び熟練し、ねりこゝのひたるのち、又二三度卷を受る事ありて、花定式にて、皆傳となるなり。此時、師の家にては、むかしよりのれきてにて、いとこち〳〵しきまんなもて、今般云々（中略）終に御相傳の事夢にも洩し候はゞ日本全國の神罰を蒙り候者也云々。と違ひ文をかき、をよびを切て、血もて判をせよとあり。れのれは、いかでさるれぞろ〳〵しき事、ゆるさせ給へと、たゞなだらかなる言葉もて違ひ置たりき。かうやうの事は、昔ながらの習はしにて、近世の理論社會より見れぞ、いとをかしからむかし。されど、若きをとめ達と挿花の師となり給へとにはあらねど、かたはし計り學び

て、やみなんは、口をしき業なり。せめて半ばのゆるしをもうけ、獨立の力を養成せざれど、學びしかひもなきとやいはむ。茶も、其始は、薄茶、濃茶の、はこび點に充分熟しなば、坐作進退のやすらかになり、さて其後變りたる點前に移りなば、何かはあらむ、令嬢がたに茶人となり給へとにはあらねど、一通りこゝろ得給ひなど、こちく〳〵しき禮法は、學ばずとも、そは書によりて、式目を知りて可なり。立居ふるまひ、物品薦撤の、めやすくなるは、茶儀なり、挿花は、經筵裝置に、かくべからざるものなれど、此道を學ばゞ、おのづから、家の内を整頓して、裝飾の心用ゐを養ふものなり。上流の令嬢がたには、適當なる業ともいふべし、かくいひもてゆけど、おのれが藝をほこり顔なりと、見る人もありなんかしと、いとやさしくはおもふものから、若き君達の、淺はかにおもひとり給ふこともありなん。かつは敎ふる人にも、世に正しからぬことの、交れるためしなきにしもあらねど、これかれもひれき給はんため、かつは技藝もさるものなりけりと、知らせ給へねかしと、おこがましくもかゝげつ。

昔、西京に遊びし折、半井節子刀自の語られし一くだりの物語を、ものゝはしにかきしるしたるを反古どもの中より、此頃、見出し侍りぬ。いとく〳〵拙きかきぶりなれど、このまゝ打ちすてんも、其事がらのあたらしければ。

安藤菊子

明治のはじめつかた、大君の、いまだ、西の京におはしましける程、世の中、いとさわがしかりけり。其頃、薩摩の國人に、新納加藤次となんいへる武士ありけり。一人の子息と、おのが妾なる女とを具して、都のかたはらにすめりけり。この人、子息をいつくしむこと、大かた、世の中にたぐひなかりけり。朝夕の出入につけても、彼に、いさゝかの風をだにひかせじ、まして、おもき病などに、身をそこなはせじと、心をつけて、いとゞ、大切にいたはりけり。妾なる女にも、おろそかならずものせよなど、つねぐ、いひをしへたりければ、かの女も、心のかぎりをつくしてかしづきけり。されど、猶、あるじのおもふさま、あまりなるまでなれば、萬の事に、手をくだせる身には、堪へがたく、心のくるしきことゞもありて、時としては、身のいとまを乞はんとおもふこともありきとぞ。

一日、あるじは、外にものしたりける折、いづくよりか、文のやうなるもの、もて來りぬ。子息、これをよみをはるや否、あわたゞしく、鎧、ものゝ具取出て、足も空にたち出ぬ。其出たつまぎはにいへるやう、今、戰はじまりぬといふしらせあり。父君かへりたまはゞ、かくと申てよといふ。妾なる女、おどろくこと、大かたならず。こは、いかなることとぞ。父君の御ゆるしもなきに、いかで、おそろしき戰場などに、御身をいだしやりまゐらすべき。よし、さりがたきことなりとも、父君のかへりたまふ迄は、とゞまりたまへかし。さなく

ど、わが身、いかに、さいなまれ奉らんなど、せちにいひと〻むるを、國の御大事なり。暫も、時をうつすべきにあらずとて、耳にも入らぬさまなりき。やがて、あるじは歸り來りぬ。ありし事ども、つ〻むべきにあらねど、つぶさに、ものがたりぬ。あるじは、これをき〻て、さながら、待ちまうけたることの如く、いさ〻かも、おどろきなげくさまは見えず。妾は、いかなる怒にふれんかと、おそる〱いひ出たる事なれど、いぶかしむことかぎりなし。あるじ、其意をさとりていひけるやう、彼が今日の出陣こそ、わがかねてののぞみにはあるなれ。亂れたる世のならひ、いつにても、君の御大事とあらん時に、先、はせ參りて、君恩の万が一つをもむくい奉らせんとおもふにより、つねに、かれが身をいたはりて成長させるなり。けふしも、年頃の願の如く、彼がめざましきはたらきをなすべき時のいたれるにこそ。そこにも、共によろこびてよなどいひて、こよなう、嬉しがりけり。妾なる女、この詞をき〻て、日頃は、このあるじを、男にもにげなく、おのが子の愛におぼれたる人よなど、おもふことなきにしもあらざりしが、皆、わが心のたらざりしなりけり。あるじの心もちひこそ、誠に、ありがたかりけれとぞ感じける。かくて、一日、二日、ふるま〻に、戰爭のとりさたは、かまびすしくなりゆけど、出ゆきし人のおとづれはなかりけり。はやく、いさぎよき戰死をやとげんなどおもへど、たけきあるじの心にも、さすがにこ〻ろもとなし。

うち死したる人のなきがらを、長持にとり入れて、大路をはこぶを見るにも、もしや、その中にもとおもひわづらひ、ひたすらに、彼の消息をぞまちわびける。かくて、三日斗すぎて、かれは、さながら、あけにそみたれど、いといさましげに歸り來り。夢かとばかりに、父はおどろきよろこびぬ。先、父君へ、御みやげに候とて、彼がさし出したる一包を見れば、なま／＼しき首級二あり。あないさまし／＼とてよろこぶものから、猶、氣遣はしきは、彼が身なりけり。奥なるひとまにいざなひて、みづから、彼が着たる鎧、もの丶具、ことごとくとりぬがせて、身のうち、のこる處なくあらためつるに、頭より、をゆびのつまさきまで、いさゝかのかすりきずだになかりけり。此時の父のよろこび、何にかはたとへん。即、料紙、硯、とり出させて、かきつけゝるうた、

なげうちしわが子しら玉きずだにもつかでわが手にかへりけるかな」嬉しさあまりて、涙こぼれにけんかし。實に、玉にもまさりて、いつくしむわが子をも、君の御爲には、修羅のちまたになげうちて、いさゝかも、惜しとおもはぬこの人の大和魂、たとしへなく尊し。また、かく、たてたる心の、をゝしきのみにかたよらで、折にふれては、かばかり、いかにやさしき三十一文字をつらねしこと、さるみやびの道にも、いたうふかかりけん。まことに、ありがたく、ゆかしき人の心しらびになん有ける。また、この子息も、若き心に、公私のけぢめをわきまへしりて、事にあたり

て、めゝしからぬ武士の心を、こゝろとしたるは、此父ありて、此子ありとかいひけんやうにて、かへすぐ＼も、めでたく、ありがたきものゝふのかがみにこそ。

隠岐の院遠嶋百首（下）

秋二十首

かたじきの苫のころもの薄けれど
　あさけの風もろでにたまらず

よのつねの草葉の露にしほれつゝ
　ものおもふ秋と誰かいひけん

秋くれどいとゞおもひも眞柴かる
　このさと人もろでやつゆけき

咲かゝるやました道もまよふまで
　たまぬきみだる萩のあさつゆ

思ひやれ眞柴のとびらをしあけて
　ひとりながむる秋のゆふべを

ふるさとの別路におふる葛の葉の
　風は吹くともかへる世もなし

いかにせむくずはふ松の時のまも
　うらみて吹ぬあきかぜぞなき

なきまさるわが涙にやいろかはる
　物おもふやとの庭のむらはぎ

おもひやれいとゞ涙もふるさとの
　あれたる庭のあきのしらつゆ

いたづらに都へだつるつきひとや
　なをあき風のをとぞ身にしむ

ふるさとの一村すゝきいかばかり

しげきのはらに蟲のなくらん

野をろむる雁のなみたは色もなし
ものおもふ露や隱岐の里には

あはれなりたかためとてや初雁の
ねざめの床になみだろふらし

たれよかし浮名を我にわきもこが
かつらぎやまのみねのあさ霧

たが野邊の木間に見ゆる槇の戸に
たえ〴〵かゝるつたのあき風

れなじくは桐の落葉もちりしくな
はらふ人なきあきのまがきに

ぬれてほす山路のきくもある物を
苔のたもとはかわくまぞなき

はのめでし人のこゝろも秋ふけて
よもぎがろまにうづら鳴なり

山本のさとのしるべのうすもみぢ
よろにもれしき夕かざしかな

よもすがら鳴や淺茅のきり〴〵す
はかなくくるゝ秋をうらみて

冬十五首

ふゆくれど庭のよもぎも下はれて
かれはのうへに月ぞはひゆく

みし世にもあらぬ袂をあはれとや
をのれしほれてとふ時雨かな

しもがれの尾花ふみわけゆく鹿の
聲きくれとぞおとはみへける

神無月しぐれわけゆくかりがねの
つむさ吹なすみねのこがらし

おのづからとひ顔なりし萩のはも
　かれ〲にふく風のさむけさ
よそよりも庭の紅葉のふかきかな
　時雨にそふるそでのなみだに
そめ殘しうらみし山もほどもなく
　またしもがれの風そすなり
たつた山まがふ木葉のゆかりとて
　ゆふつけ鳥にこがらしのかせ
ちりしける錦はこれもはへぬべし
　紅葉ふみわけかへるやまびと
冬こもるすゑのさむけさいかならむ
　つま木の道をうづむしらゆき
山風のつもるはやがてふきはてゝ
　ふれどたまらぬ峯のしらゆき

さながらや佛のはなとちらせまし
　しきみの枝につもるしらゆき
けさみれど佛のために摘むはなも
　いづれなるらん雪のうもれ木
かぞふれど年のくれぞとしらるれど
　雪かくほどのいとなみもなし
おく山のふす猪の床やあれぬらん
　かるもにたゝぬ雪のしるしに

雜三十首

いにしへの契もむなしすみよしや
　わがかたそぎの神とたのめど
おきわびぬきえなはきえぬ露の命
　あらむ逢瀬をまつとなきみを
とへがしな雲のうへよりこし雁も

ひとり友なきうらになくねを
もしは焼海士のたくなは打たねて
くる跡だにもいふかたぞなき
かもめなく入江の潮のみつなへに
わしの上葉をわらふしらなみ
なみち分け沖の小島にいるふねの
われとこがるゝたへぬ思ひに
しは風にこゝろもいとゝ亂れ蘆の
ほに出でなけと問ふ人もなし
里とほくきねか神樂のこゑすみて
れのれとふくる窓のともし火
われころはわらしま鳥よれきの海の
わらきなみ風こゝろしてふけ
ながき夜をなく／＼明す友とてや

ゆふづけ鳥のこゑぞまぢかき
曉のゆめをはかなみまどろめど
いやはるかなるまつ風ぞふく
とにかくにつらきは沖の嶋つどり
うきをはれのが名にや答へん
すぎにける年月さへぞうらめしき
いまころかゝる物れもふ身は
夕月夜はりねにしはやみちぬらむ
わしのうらわに鶴のもろこゑ
都びととはぬはどころしられけり
むかししのぶのかやか軒端に
日にそへて繁りぞまさる青つゞら
くる人もなききまきのいたどに
なにとなくむかし語りに袖ぬれて

ひとりぬる夜もつらさかね哉

ひと心うしともいはじむかしより
くるまをくだく道にたとへて

美保の浦をつきと友にぞ出し身の
ひとりぞのこる隠岐の外山に

たぐふべきむろの八嶋も遠けれど
思ひのけぶりいかにまがへむ

はれやらぬ身の浮雲をいとふまに
わが世のなかの影ぞふけぬる

さそひ行ど我れもつれなんやこ迄
あなちのかぜにまよふむら雲

よしやたゞいはなみ高きよし野川
よしや世の中れもひすてゝき

とにかくにひとの心も見へはてぬ
夏や野もりのかゞみなるらん

ふるさとの苔のいは橋いかむかり
れのれわれても戀わたるかな

れなし世にまた住の江の月やみむ
れもへどかなし隠岐のしま守

隠岐の海に我をやたづぬる友千鳥
鳴く音はれなじ礒の小むしろ

水茎のあとはかなくもながれ行ど
すゑの世までや浮をとゞめむ

とへかしなれは宮人の心あらど
さすかに玉のををたへぬ身を

なひかずどまたもや神に手向くべき
思へどかなし和歌のうらなみ

（をはり）

お伽ばなし

蓑蟲のはなし　　須賀の屋主人

みの蟲、子をうめり。はだへは玉なし、羽根はうす物のやうにて、光るばかりならむ。と、思ひしは、そらだのみにて、いと、みにくゝ、おそろしげなる面つきなりけり。あな、うたて。親に似ぬ鬼の子うみけりとて、淺ましがりて、面に綿かづかせ、父母は、やみがたきことわりて、しばし、外にあらむほどに、侘びしくも、とゞまりて、居よ。やがて、秋風たゝば、かへりこむと、すかしたのめて、いづくともなく、いきうせけり。されば、蓑の蟲の子らは、秋風のたつごとに、契りし親の言のは思ひいでゝ、長き夜なく〳〵、わかずに、ちゝよ〳〵と鳴くなりけり。寂蓮法師が歌に

契りけむ親の心もしらずして
秋風たのむみの蟲のこゑ

はかなき蟲も、親をおもふ兒心は、人にかはらぬものにや。あはれなることなりかし。世に、親に似ぬ兒を、鬼子といふは、みの蟲よりはじまりきとなむ。また、みの蟲の、あやしき物かづくは、親のかたみの、今に殘るなりけり。

蛙のはなし

かはず、子をうめり。親に肖ず、尾ひれなどありて、魚のかたちしたれど、いとよろこびて、われら「水にすむ蛙」とはいへ、淺き池沼、濁れる田の面にのみありて、わらべの竹さき、田をさの鋤のはにおどろかされ、たま〳〵、底ふかき井のう

ちにすめど、大空を忘らぬなど、あざわらはるゝことの悔しさよ。さるに、この子ら、親にもにず、尾ひれそなへて、魚のかたちしたれど、やがては、おひたちて、大海はしる鯛とも、瀧津瀬のぼる鯉ともなりなむ。と、樂しむかひもなく、日かずふるまゝに、やう〳〵、尾ひれうせて、手あしれひいで、つひに、親のごとくなれり。親かなしびで、かはづの子はかはづよ。と、なげゝり。これより、親に肖てつたなき人を、かわづの子と、いひならはすとなむ。げに、賤しききはのことゞにいふごとく、瓜のつるに茄子みのらず。人は氏よりそだつものにて、王侯將相にたねあらずなど、唐人はいふめれど、御國人には、氏こそ、たふときものなれ。

うすこほり（二）

霧の舎主人寄贈

九番

左　元

濱まつのあらしのうちにむら千鳥
ちよと鳴音の聞ゑけるかな

右勝　儀貞

浦かぜに吹たてられて友千鳥
よる方なみに音をやなくらむ

はままつのあらしのうちなとまことにところをゑたりといふべしさるに

鹽の山さしての、磯のむかしより、千世はふりたる聲にさりける、されど吹たてられてよるかたは、よる方にやさため侍らん。

十番

左持 夜紗

沖つなみよする高しの濱風の
寒き夕にちどりなくなり

右 嘯月

大ゐ川河かせさゆる有明の
月に声はなくむら千鳥かな

ろのすがた、高しのはまの、いと高しとや申侍らん、ろのしらべ大ゐ川、れはろけにもあらざめれど、例のこゝろまよひ侍り。

見し世より、朝ゆふこゝろ沖つなみ、明くれ名殘あり明の月、いづれもれのがむかしの知人に侍れど、去ぢらく持とぞ申れき侍りてん。

十一番

左持 近

河れどもさゆる霜よの明方の
月に殘りてなくちどりかな

右 直躬

はりまがたひゞきの灘の浪の上に
たゞよふ千鳥こゑのかなしさ

川れとのさゆる霜夜またれのか寝覺にして明方の月身にしみ侍り

都までひゞきのなだの浪のうへはみるけしきにもれくれざりける

十二番 雪

左勝 常清

けさはまた花とも見へて紅葉の
散にし山に降れるしら雪

右　　　嘯月

白妙の雪のつもれるけしきには
　くらべみるべき物なかりけり

紅葉の後のはつ雪まことにむかふこゝちし侍りかくむかり花にまかへて見る雪をなと月にたにくらべざるらん

十三番

左持　　　久敬

朝戸わけて思ひもかけず見る雪は
　遠山なからめづらしき哉

右　　　齢

降つもる雪れもしろき山さとに
　かれし人めのをしくも有かな

此一つかひは、世にたゝならず見て侍れど、つたなき筆をど、いかゞはくだし侍らん、されど遙見近く見きはめ侍るに。

雪やいづれ、遠山ながらめづらしく、やまさとながら、面白きかなあな、めづらあなれもしろ、思ひもかけぬけしきには、かれし人めも何かはいはんたゞ又めづられもしろところ。

十四番

左　　　成久

ひんがしの山遠からず近からぬは
　程は雪にぞ嬉しかりける

右勝　　　直躬

鳰とりの啼音さゐ渡る大澤の
　汀の松につもるゆきかな

東の山は、あまりになれたれど、まつ見まは

しき大澤の池鳰とりの、さゑわたらん聲は、としの春のはなの雪にも聞しり侍りて、いよ〳〵今更になん。

十五番

左持　　　文秋

鞍馬山みねのこからし吹たへて
　初雪ふれり靜原のさと

右　　　久道

都には梢の花とみるゆきを
　いかにわぶらんこしのやま里

初雪ふれり、靜原のさとは、はつ雪ふれるさよの中山、といふにもさむかりれくれずや侍らん、又こしの山さとをしも、思ひやられたる哀なり。

玉しきの都にちかきしづはらも雪にはれなし

越の山人

十六番

左　　　周慶

誰しかもあはれとみざらん黑玉の
　くろ髮山につもるしら雪

右勝　　　正高

しらゆきのつもり〳〵てふじのねは
　雲より上に見ゑわたるらん

まことやふじのねは神世より積れる、玉の塵なれど、天津雲井にてりわたるらん、あふけどいよ〳〵しらべ高く、ふして思へど、此卷中の光りなり、黑かみ山も、さらになへてには侍らねど、かけては及かたくや、かつ頼政の末句にもひとしからんにはまして。

十七番

左　秀胤

大井河おろすあらしに花とのみ
散くる雪のおもしろき哉

右　實壽

しら雪の降し朝のたのしさは
をさな心にかはらざりけり

あらし山の、雪のはな所から、おかしからずやは、おのれ月と花とにこへて、たゞ雪をしもめづるくせあなれは、をさな心いとゞ身にしみ侍り、されどとし〳〵。

わが門の柿の木のへに、ゆきやこん霞やこんと侍らぬことなきこゝろには、うれしきかたとやろゞろき侍らん。

十八番

左持　天朗

月花の面かげながら白雪の
ふれる朝はめづらしきかな

右　儀貞

玉ぼこの道もわかれすかきくらし
拂ひかねたる袖のしら雪

月花の面かげも

かきくらしわかれぬけふのしら雪に何のひかりか思ひとゞめん

十九番

左勝　芳

うき雲の立はなれゆく山のはに
先初雪に見ねろめにけり

右　　　盧岳

此あさけ初雪ふりて冬枯の
　庭れもしろく成りにけるかな
いづれ初ゆきの、めづらしからずは侍らねと、

雲はなれゆく山のはゝ、一きはけしきありて、
見へ侍るにや。
　冬がれの庭にふりしもれもしろし面白けれと
ふゆかれの庭

（未完）

花ふゞき

鹽井雨江

その十七

三郎が妻の誘ふまゝ、賤機は七郎と共に、恐るゝ色もなく、客殿にうち通り、悠然として、設けの席につきながらも、心には少しの油斷もせず。彼、何事をか語らむとする、如何に云ひ解かむとする、いざ詐らむとするも、詐らるべき吾かは、諞らむとすとも諞らるべき吾かは覺悟してこそ、語らむ語れ。いざといはゞ、一歩も動かさじ許るさじと、思ひ込みたるむら肝の心は、血色にあらはれて凄じく、彼方をきつとうちまもれぞ、三郎が妻は、隱す所憚る所もあらぬを、示さんとにや、殊更に周邊

の褄を取り開かしめて、靜に此方をうちまもり、夫三郎より固く他言を戒められたる事には候へど、おん身が三郎を疑ひ給ひてのおん恚りの、誠に唯ならず、よくよく深きゆかりあるおん方と覺ゆるに、且つ仔細をつげまゐらせでは、其の疑を解き奉るよしなけれど、今こそ始終の事情をあかしまゐらすなれ。初めより、うたがひてのみにては、是非を分け給ふによしなし。暫時は、疑をとき給ひて、わが、申さむ程を聽給ひてや。さて、後に、誠に疑ふべきあらで、疑ひ給ふとも、責め給ふとも、お心に任せ給へ。悦びて、おん敎に從ひ參らせむ。夫三郎とて、斯る鄙のわたりに住み馴れては候へど、あながちに、武士の道、踏み分けかねたるものにも候はず。たどたどながらも、手ならしの篠矢、直なる道ばかりは、人におくれじものと思ふなるが、日來の心願に侍るなれど、京鎌倉の戰起りても、此の有井が家は一旗をだに、北條の風下に、汚くも建てたる事は侍らず。されど、もとより三郎が郎黨の限りは、笠置の山に、不忠の弓矢引きたる者、一騎とても候はず、赤坂の城に、不義の刃を振ひたるものも、一人とても候はず。一の宮のおん上を預り奉りしは、誠に深き慮りの候ひし事。まさかの時のおん守りとなり奉らむばかりの志に出でたる業に候を、





これぞかりもて、北條の一味とればしめされむことは、口惜き限りに候殊更に、御座所を固め、警護を添へまゐらせしも、一は敵を欺む爲め、且つは不忠義の難義に備へまゐらせたるのみ。

藻屑が花、磯の月、かにもかくもして、れん心の慰めらるゝ事をころと、とさまかくさま、心を砕き参らすれぞ、兎角に、れんながめ勝ちにのみすぐさせ給ひて、れん心地も勝れさせ給はぬを見奉るに、心苦しき事限りも候はず。斯くては、いとはし。せめては、苫屋の春秋、諸共にかたらひ給ふ都の人のましましたらむには、霞に霧に、さぞかりは、御一人曇り勝ちにのみは暮らし給ふまじと、思ふものから、時文といはるゝ御近侍をかたらひまゐらせじ、密に都へ上せ奉りしが、如何にしけむ、待ち奉る方も見えず、行きたる人さへ歸らねぞ、かゝらむ爲めにとは、思ひ植ゑざる御前の眞萩は、徒らに秋更て、散りまぞふ露のみしげく、かゝらむ色にとは、思ひ侍たざりける軒端の花は、春たちて、空しくものをれもはする、色のみ深くればねけれぞ、夫なる者も、いつまで斯くてのみ止むべき、兼てより思ひ定めたる志のほど、今ころ捻げと思ひ立ちたる折りころよけれ、此のわたりにも隠れなき船上山のれん戰、

今日こそ時來にけれ、いで〳〵御加勢仕らむと、忍び〳〵に郎黨をもうち立たせ、遂
に宮をば助け奉りて、打ち立ちたるは、彌生のはじめばかり。昨日今日は、はや彼
方にまゐり着きてにあらむ。もどいたらぬ身の、及ばぬことのみ多かれば、宮の御
爲め、いまだ盡くしてとは申し難きも、去り迚、君父の仇といふ非道の罪をば、呼
ばれまゐらすやうのればねは、夢候はぬものをと、過ぎ來しかたのいちぶ始終、包ま
ず飾らず、潔白なる言葉にも、匂ひこぼるゝは無量の赤心。
賤機とて、常の女にあらず。人に勝れたる心あり、人に勝りたる眼あり。三郎が妻
の風采の唯ならぬ氣高きは、一目見たる時より、早くも知らぬ。そを認めたればこ
そ、彼が誘まゝに、物語をきかむとは、承引きたるなり。去るに、今又その言葉の
すゞしく粧らざるを聽きては、など、今更に、是非を分けざるべき。されど、賤機
は、世の中を、飽くまでつらく賴のまれぬものと思へり。彼が神とも仰ぎたる宮は、
孤島の新島守と成り果てられ、彼が天とも賴みたる御息所は、流寓漂泊のたん身の
上となり、彼が命とも賴みたる父武文は、あへなく難波渡頭の波と碎けて歸へらず。
さかしうあれど、猶十八年の彼が、世になれぬ心は、如何ばかりか烈しく刺擊せら

れしずそは。實に彼は、世の中を、困難危險いふばかりなく、露ばかりも塵ばかりも、頼み難きものとせり。故に、彼は、三郎が妻の冷しげなる風采を見、詐りげなき言葉をきくも、なほ、容易にはこゝろを放るさず、言葉はなくてうちまもれど、彼方は、なほも語をつゞけ、れん身の知り給ふよしにあらねど、疑ひたまふ事なれど、三郎は、北條づれが卑き郎黨にも、家の子にも候はず。三郎が家、もとを申さば、遠く源氏譜代の直臣。北條づれが倍臣の倍臣には候はず。時に騙られ、世に逐はれ、かかる所に、世を狹めては候へど、北條が隱謀ゆゑに、やみ／＼主家を倒されたる怨は、手馴の太刀の束の間も、忘るゝときは候はず。此の怨み、何時かはと、起て思ひ臥してれもふなる此の年月、北條とは共に天を逐げざるが、夫三郎が志。何を思ひて、誰か、北條に組みし、北條を助くる道理の侍るべき。よく／＼思ひても見られよ。愚かなるものゝ、古事は、數多侍れど、我が倶不戴天の仇なるものを、助けたりといふものをきかず。されど、三郎がいかでか北條に。ろは、かへす／＼、れん身が知らざるゆゑの疑にてろ侍るなれ。天皇の稜威を戴き、勤王の旗うち立てゝ、北條征伐ころは、夫三郎が、身を捨て家

を捨ても、是非にうち立ちまはしくれもふ所なれば、笠置に御籠城在らせらるゝときくや、悦びはいふべくもあらず。堀の埋草にもと思ひ立ちて、家の子ども、とみに驅り集め、はやうち立たむとしたる折から、宮方の御不運、笠置は破られたり、都の中は悲風愁雨、雲の上なる御車も、とゞめ給ふ所なしといふ注進。三郎は、足ずりし身うめきして、口惜しがり候ひしが、俄に思ふ事の候へば、暫時北條をたばかりすかし、かしこくも、宮を預り奉りたるも、まさかの時の御指揮を受け賜はらむと、れもひ參らせたるばかりに候。三郎が志、かくとは知ろしめさねば、うたがひ給へるは、道理には侍れば、今は疑を解き給ふころ願ひなれ。夫三郎が志、親らが申さむてこそ、これより外には候はず、かくても、なほ怪しくおぼしめさば、さては術なし。今より、御身とともぐ〵に、伯耆やらむ船上山の御陣所まで參りて、夫が志自らが言葉の、果して詐りなきを、まのあたり見せ奉らむのみ。なほ疑ひは解け給はずやと、言葉にも氣色にも、こぼれ出でゝにはふばかりなる誠。今は賤機、疑はんとれもふとも、何かは疑ふ力あらむ。泣かねばかりになりて、膝うちよせて、三郞が妻の手を取り、さばかりの御志とも知らで、よしなき疑ひをかけ奉りし罪、謝

まゐらする道は侍らねど、親らも又忠義一圖に、れもひ詰めたるよりの慮外、唯々〳〵容るさせ給へと、只管にうち詫ぶれど、彼方は嬉れしげにうち笑みて、いなとよ、詫び奉る罪は、なか〳〵に隱したる此方に侍るものを。さ仰せられては、いよ〳〵心苦し。さるにても、疾くきかまほしきは、御身が父と、やさしげにもうちとへど、賤機はればねずせきわぐる、無量の感慨、たへずなりてか、血涙一滴、短刀の柄に落ちて聲あり。

文林

谷新樹　東久世通禧

志げりゆく木々のわか葉に谷川の
れとさへほそくなりぬべき哉

近衛忠熙

谷かげのわをきか中にくれなゐの
わか葉や秋のいろをみすらん

庭卯花　毛利元徳

ありあけの月のひかりは卯の花に
ゆつりて志らむにはの面かな

山家夏　鍋島直大

いつの間に夏のけしきに成ぬらん
見なれしむらも青葉志げりて

山家夏　前田　利鬯

ひとすちのかけひの水に夏の日も
すゞしさあまるやまかげの庵

津輕　承昭

青葉山しげみにつゝむわかいほは
夏もすゞしきところなりけり

庭卯花　竹屋　光昭

夏木立れくらきにはもこのごろは
うのはな月夜ゆふやみもなし

わが子の米國より歸朝せるときよめる　高崎　正風

たらちねの親のやまひも癒にけり
此よろこびやくすりなるらん

庭卯花　前田　利聲

うの花の咲ける垣根はしろたへの
ころも干かとあやまたれける

山家夏　松浦　詮

木々はみな若葉しげりてやま里は
いとゞみやこに遠ざかりけり

水野　忠敬

水の音もちかく聞えてすゞしさは
この山かげのいほりなりけり

郭公遙　小出　粲

雲まよふ卯のはなやまのうす月夜
ほのかになきて行ほとゝぎす

曉郭公　遠山　英一

若葉よりしたるゝ露もほの見えて
ありあけの月に啼ほとゝぎす

寄深戀　宮地　嚴夫

忘れんと思へどむねにうきくさの
うきにたゝよふ吾こゝろかな

山家夏　松本　高明

山もとの草のいほりはせばけれど
夏しらぬまですゞしかりけり

大口　鯛二

訪ね來てすゞしと人のいはざらむ
夏ともしらじやまかげのいは

少將　佐々　豐水

後のよの月のみうらのかげたかく
よにあふがるゝ女つかあはれ

谷新樹　鍋島　榮子

茂りあふ木々の青葉につゝまれて
ありともみえしたにのした庵

庭卯花　柳原　愛子

つくろはぬ賤が垣根にさきつゞく
うつぎのはなのおもしろき哉

山家の夏　蜂須賀隨子

山の井の水にこゝろをうつしつゝ
すむべき夏になりにけるかな

田上螢　松平　健子

早苗とるひとはかへりし垣つ田に
影あらはれてとぶほたるかな

小池　道子

やまさとのかきねをめぐる谷川の
音このましきなつはきにけり

北島以登子

なつの日はまつの梢になくせみの
はかに聲なきやまかげのいほ
前田　朗子

卯の花の咲みだれたるわがにはに
日のくれ行もれたろくぞ有ける
鶴　久子

古寺燈

みわかしのかげころ添はれ古寺の
ろやのれこなひ今は玄むらん
鶴　久子

新樹露

わか葉さすみどりの色にれく露の
ながめ涼しきなつのゆふぐれ
諏訪　晴子

郭公遥

ほとゝぎす今一こゑとれもふまに
かげふ八処ばずなりにける哉
遠山はね子

納涼風

はしゐして風まちをれむわか竹の
葉すゑうごきて月も出にけり
牛島　歌子

旅宿子規

ふる里の友に逢ひぬるこゝちして
たびねの床にきくほとゝぎす
師岡須賀子

古寺螢

なき人のたまかあらぬか古寺の
み墓のほとりてらす螢は
海上　壽子

深夜ほとゝぎすを聞く

林　蟹臣

夜も、はや更けにけむかし。風、冷やかに打ち濕りて、月影いつしか光り消え、雲、暗を閉ぢて、

雨の音、ポツリ〳〵と、軒に、はらめき落つ。「郭公よ、今宵ころは、と、思ひつるに」と、腹たゞしきまゝに、窓さしかためて、枕とりたるに、やがて啼きて渡る。

　昨夜のごと拂ひ開けても寐なましを
　　窓のうへ近く鳴くほとゝぎす

さすがに、なつかしくて、更に戸、たし開きて、仰ぐ空に、月は、かう〳〵と、雲間いづ。折りしも、

　今啼くにくらべて聞けむ郭公
　　夢なりけりな先きの一こゑ

郭公をよめる歌　　海上壽子

高麗劍吾が住む里は、卯の花の咲ころ匂へ、橘の咲ころかをれ、うの花の色をさやけみ、たちばなの香をかくはしみ、あしびきの山ほとゝぎす、ひまなくそ來なきとよもす、時なくそをちかへりなく、さ月へて花はちるとも、けふのこと吾が住む里に、かれすなかなむ、

水雷艇　　敷島雨江

その一

渤海遠く吹きわたる
　シベリア嵐音さねて
なごろも氷る冬の夜の
　月かげ寒き山東角

三ツ四ツ五ツつらなめて　沖の廣瀬の波がくれ
うくは千島かわし鴨か　影れもおろき水雷艇
乗りたる人は誰ならむ　乗れるは猛き日本人

その二

すめらみことを賜りて　潮にうけすへ軍艦
敵にへむけて漕ぎくれむ　おなどの風はおきるとも
わだつみなはゝ湧くとても　めざしゝ敵を破らでは
手向ふ艦体砕かでは　舵をいかでかかへすべき
眞心かたきやまと男の　いさみて乗れる水雷艇

その三

夜はいよ〳〵更けゆきて　吹くなる風も氷るらむ
空は隈なくはれながら　あられうつなり舟の上
何を待つらむ乗組は　おまゆく月をながめつゝ
酌みかはしたるブランディ　取る杯ともろともに
直隷滿州山東省　彼は幾度のむならむ

その四

高根の雪に埋れて
月はかくれぬ九馬嶺
沖の白波かげくらく
音のみ高くなりにけり
それをながめて艇長は
いざやものども進まなむ
かなたに月も落ちにけり
こゝなる瓶も傾きぬ
殘るはにくき支那艦体
彼れをも擊て沈めなむ

その五

それうち聞きて乘人も
いふにや及ぶ艇長よ
わが乘りたるは水雷艇
日の出る國の水雷艇
いざや砕かむ敵の艦
劉公島のしまがくれ
藻屑がもとの浪枕
中華の眠なほさめず
蝴蝶の夢に迷ふなる
敵の艦体いざ砕かむ

その六

さらばものどもとくゆかむ
いでや進めとさしまねく
聲に應ずる水雷艇
日出る國の水雷艇
三ッ四ッ五ッわとやさき

大和心の一筋に
いづれも向ふ劉公島
山河もわかぬぬむ玉の
闇をたよりに拕とりて

その七

山東角をあとに見て
すゝめむやがて趙褡嘴
鹿角嘴をもいつかすぎ
なほ奥ふかく威海衛
めさす邊りも近からむ
闇はいよ〳〵あつまりて
唯見るものは袖の霜
遠の高根に積る雪
きこゆるものは夜を寒むみ
寐られぬ鳥のこゝかしこ

その八

今こそきたれ劉公島
間近く浮くは何ならむ
ゆづ岩むらかはなれそか
くろがねたゝむ敵の艦
音にきこえし定遠號
いざやうたむとちかよれむ
敵もそれとや覺るらむ
沖のむら鳥磯の波
うたれじよせじと立さやぎ
うつ彈丸はあめあられ

その九

思ひ入りたる敵の灣

めざし丶艦を砕かずむ
生きて舟路にかへりをむ
兼てねもはぬ水雷艇
日出る國の水雷艇
しのと亂れて降りしきる
彈丸のふゞきを凌ぎつ丶
なほもちかよる定遠號
ねらゐ定めて艇長は
やをら放ちぬ水雷を

その十

あなおもしろや定遠號
東洋一とほこりたる
きのふは敵の定遠號
塵と砕けて飛び散れむ
動くや天地吾すごし
あなおもしろと水雷艇
日の出る國の水雷艇
へりを叩きつはやしつ丶
舟をかへさむ山東角
笑うてむかふ朝日かげ

師に違ひし言葉

田邊和氣子

さんぬる年、大人が御門に入立て、花さす事を、學びしに。師の御いつくしみふかきより、おろかなる心にも、や丶此道にすゝみ行けむ。いやつぎつぎに、さづけ給ひし、御ゆるしの數。あまたつもりし其うへに、去年の秋、七種の傳へぶみさへかつ

け給ひし、ふかき御惠だにかしこきを、ことし又、我國の野に山に、いや茂りあふ草木の花を、かき集めたる御書に、取添たまはりしは、花定式の卷ものなりけり。年頃、霞かゝれる花の山は、雪か雲かとあふぎ、霧のろこなる秋の野は、にしきとのみ、れもひたどりしも、此卷を開きみれど、心の迷ひはれゆきて、花の數〳〵折盡したる、心地のするも、敎への親の、御手引にころあなれ、されど此卷ものゝ事どもは、大人が家の、奥ふかくものさせ給ふ。ことにしわれど、あらはに人に、見せむはさらなり、わからさまなるうたゝねの、夢にも人にもらしなむ、天つ神國つ神の、れぞろしき、御とがめを、うけ侍らんと。違ひうけもて、かくはかいつけ侍りぬ。

花かめに汲てやさゝむ天地の
　ことわりふかくうかふいけみづ

長谷部信連を論ず

落合爲誠

長谷部信連は、智勇共に、備はりたる人といふべし、平家の郎黨、以仁王を捕へ奉らんとて、宮に亂入しける程、俄に王を、女房の形に、仕出て、落し參らせしは、智なりといふべし、一人踏留まり、數多の敵を、相手として、戰ひしは、勇なりといふべし、されど、信連は、唯智勇をもて、譽むべき人にあらず、實に、忠なりといふべし、ろを如何にといふに、智も勇も、すべて、君の爲に動きて、感ずるに餘あり、其後、南北朝の頃、村

上義光が、護良親王を、城より落し進らせ、其身は、親王に代りて、死にしこと、能く世に、知られたり、信連の、以仁王に於けると、義光の、護良親王に於けると、事いたく似て、信連が、智勇も、義光に劣るとも覺えず、さるに、義光のみ、名高く聞えて、信連は、然らざるは、何故ぞや、信連の忠なる事、義光に及ばざるか、又義光は、潔く死し、信連は、長らひし爲なるか、或人いへるやう、信連の王に、別れ奉りし時の言語によれど、名を好みしならむと、さる事もありしにや、されど、信連が、平家の館に到りて、陳じたる言語につきておもふに、能く物の理をも、辨へたり、あながちに、名をのみ好みしには、あらざりけらし。

雜報

●皇后陛下の御誕辰　いにし五月の廿八日は、皇后宮の御誕辰にあたりければ、宮は、西の京にいでまして、こなたにはおはしまさねど、市民ら、いづれも、壽ぎ祝ひまつらぬはなく、わきて、茗溪の女學校、築地の高等女學校にては、生徒たち、うちそろひて講堂につどひ、つゝしみて、御影を拜み、祝歌うたひて、祝ひまつりきとなむ。あは

れ、明治の大御代は、聖徳たかき　天皇命上にまして、天津日影の天の下照すが如く、國民をあはれびをさめ給ひ、慈善深き　皇后宮は、雨露の木草はぐゝむ如く、青人草をめぐみ給へど、世界いづれのはてにか、かゝる、たのしき、たふとき、めでたき御代のあらめやも。

●皇后陛下の御還御　綾に畏こき我が　皇后陛下の廣島に行啓あらせたまひてより、こゝに三月、府民みな御還啓の一日もはやからんことを祈り奉りしが、皇后陛下にはいよ〳〵、いにし三十一日午后二時、めでたく御還啓あらせられぬ、申すも畏きことなるか、陛下にはうちに、天皇陛下をたすけ給ひ、そとには國民をめぐませ給ひ、わきて日清の戰爭始まりしよりのちは、あるは繃帶を御親製あらせられ、あるは義手義脚を下させ賜ひ、あるは豫備病院を見舞せたまひ、その坤徳山よりも高く、その慈恩海よりも深し、いまこのめでたき、御還啓を拜し奉りて、よろこびのあまり、記者もろゞろに感涙に咽びあへぬ。

●女教師の歎　歳月われをまたず。げに一時をくねる盛のみじかさよ。われは、もと、これ、伊勢安濃津のうまれ。六歳、はじめて小學にいりたち、つゝゐづゝ、ふりわけ髪の友どちと、教の草をつむにつけ、わが身の才やすぐれけむ。學力われにならぶものなくて、試驗のたびに、うる優等も、阿漕の浦にひく網の、たびかさなりては、世にあらはれて、あはれ、この女は才女よな。はや、れひたちが見まはしと、世の人々のとり〴〵に、も

てはやすを聞くたびに、をさな心にもうれしくて、勤しみつとめぞ、たらちねの親はよろこび、師の人も、ほめつ、たゝへつ、はげますに、その効ありて、十四の春やむかしに、男の子にもまさりし成績にて、めでたく小學の業ををはりき。つゞいて、女學校といふにいりぬ。をりしも、敎育展覧會といふものありて、われも、文つくり、水莖のあと清うして出しゝに、見る人々、たれとて感ぜぬはなく、あはれ、かく、言のはのうるはしく、水莖のあとのめでたきは、いにしへの淸女紫女ならではあるまじ。ゆくすゑたのもしき少女よなど、ほむるものありて、われは一等賞をえたり。われ、これより、學問もて身をたてむと思ひたちぬ。今さら思へぞ、はかなきあいだのみなりけり。

ころしも、歐風しきりに吹きあれて、たれかれとなく、あらそひて西洋風をならひければ、われも、人におくれず、髮を束ね、洋服といふもの着て、鶩の腰つきを恥かしとも思はで、得意顔にはねまはり、赤き髯人に英語といふもの學びて、鴃の口つきに、老いたる人たちをおどろかし、男女交際などいふより、男のうちにも立ちまじりて、議論をなし、また、人なかにいでゝ、演説といふをなし、男女同權、さらにすゝみては、女尊男卑などいふことわりを説きたりき。このころ、世の人は、われを女丈夫とよびて、もてはやしき、されぞ、われは、さいはひに、武士かたぎのかたき家風と、おのが性質の、をゝしきをこのむよりして、他の諸

孃のごとく、あだめいたることもなく、あらぬ艶聞たてられしこともあらざりき。

あるとき、同じ學窓の茶話の會に、發議す人ありて、この學窓につどふたれかれも、將來、夫さだめせむをりには、かならず、奏任以下はねらむじと契ひて、師範の生徒たちに、うらまれしことありき。されど、この折の、わが志は、さる卑くちかき處にあらずして、あだかも、大鵬の翼をさめて、羽たゝく折をまつ心地しき。

やう〱、わが學力のすゝむにつけ、田舎の師の物たらぬ心地し、且は、まじらふ人々の品ひきくて、井の底にすむこゝちすれど、あはれ都のなかにたちいでゝ、智識をみがき、交際ひろくせましと思ひたち、父母のゆるし、師の賛成をえて、いよゝ、上京と事さだまりぬ。

いざ、うちたゝむとするや、新聞紙、まづ、わが事をかきたてゝとりはやし、教育家といふ人々は、離別の會もよほして、わが行をさかりにし、口々に、女子教育のためにつとめよといへど、若き友どちは、女權のためになど、望まるゝこととり〴〵にて、双肩にあまる名譽をになひて、百里にあまる海山こえ、花の都にきつきしは、はや、十年のむかしなりけり。　（未完）

●華族女學校及其の他の祝典　去る二十八日は皇后陛下の御誕辰日に當るを以て、華族女學校にては、例年の如く休業し、午前九時より教官生徒一同謹てその祝典を擧げたり、當日細川校長の演説あり、續いて君が代及び金剛石等の唱歌を奏

し、十一時に至り式全く終る。同日女子高等師範學校にても、秋月校長及び各教員登校の上、例年の如く奉祝會を催したりといふ。

●皇后宮の山陵御參拜　皇后宮には、去る二十四日京都なる泉涌寺、東福寺、御行啓後月輪御陵孝明天皇御尊牌及び御父前關白左大臣一條忠香公の御靈牌等に御參拜あらせられ御寶物等御覽の後、午後三時御還啓あらせられぬ。

●皇后宮の博覽會行啓　兼ねて御定めの如く同じ宮には去る二十六日午前より第四回內國勸業博覽會へ行啓あり、先づ美術館に入らせらる、この時、海軍樂隊は君ヶ代を奏し、九鬼審查總長以下の各委員は、同館前に整列して奉迎したり陛下には、美術館內の便殿にて、暫時御休憩の、後、樓上樓下の東部を御通覽あらせられ、九鬼審查總長、山高、森本の事務官等に向ひて種々の事ども御下問あり、それより御晝餐を聞召され、午後より水產、器械、農林、工業の諸館を御通覽あらせられ、臨時御休憩所にて御休みの後、小松宮殿下の御先導にて再び工業館の出品を御覽あり、それより赤十字社出品の移動假病院陳列場に至らせられ、終りて、再び美術館の西部を御覽濟の上、六時四十分御還啓あらせられたりと承はる。

●勅語の讀み方　敎育に關する勅語の讀方は、人に依りて一定する所なかりしが、こたび男女兩高等師範學校にては、左の如く定められたりといふ。

勅語

朕惟フニ、我カ皇祖皇宗、國ヲ肇ムルコト宏遠ニ、徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ、我ガ臣民、克ク忠ニ克ク孝ニ、億兆心ヲ一ニシテ、世々厥ノ美ヲ濟セルハ、此レ我ガ國體ノ精華ニシテ、敎育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス、爾臣民、父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ、夫婦相和シ、朋友相信シ、恭儉己レヲ持シ、博愛衆ニ及ボシ、學ヲ修メ、業ヲ習ヒ、以テ智能ヲ啓發シ、徳器ヲ成就シ、進テ公益ヲ廣メ、世務ヲ開キ、常ニ國憲ヲ重シ、國法ニ遵ヒ、一旦緩急アレバ、義勇公ニ奉シ、以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ、是ノ如キハ、獨リ朕ガ忠良ノ臣民タルノミナラズ、又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ、實ニ我ガ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ、子孫臣民ノ倶ニ遵守スベキ所、之ヲ古今ニ通シテ謬ラス、之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ、朕爾臣民ト倶ニ、拳々服膺シテ、咸其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名　御璽

●新作唱歌　平安奠都祭、及び博覽會に連れて京都に開ける帝國敎育大會は、去る二十三日の發會式にをいて、左の新作唱歌を奏したりとぞ

敎草

はたさせあまり。朝宵に養ひ來ける敎草　花さきいでぬうるはしく。さつくに人もめづるまで。

たゆますうますいろしみて。養ひ立てん敎草。外國々にたぐひなき。よき實をさはに結ぶまで。

めぐみの露にさかえつゝ。み國に生ふる敎草。うつしく植ゑん

虎のすむ、もろこしこまの荒野まで。

●貴婦人の養老ゆき　もと尾州家の御隱居貞德院殿をはじめ、德川義禮公の夫人よし子、舊山口藩主毛利元德公夫人やす子あはせて二十名ばかりの婦人たちは、さる十六日、岐阜縣多藝郡養老公園に遊び、瀑布を觀られけるに、同地の伊奈治明といふ人、

むかしよりおいをやしなふ多度山の
　いづみをくみて榮えませきみ

と詠みて、貞德院殿へさし上げけるに、院にはことの外よろこばれ、

れり立ちて我れも結ばむたど山の
　老をやしなふたきのしらいと

とやさしくもよみ給ひて伊奈氏へ與へられけるとかや。

●奉迎の唱歌　こたび高等師範學校附屬音樂學校にては、御還幸の際、奉迎の意を表するため、諸學校の生徒をして謠はしむる爲、左の歌詞を撰みたりといふ、その作歌は、黑川眞頼氏にて、作曲は小山作之助氏なり。

第壹章

からくにの　ことたひらけて
たひらかに　いまぞくわんかう
みくるまの　おとしとゞろに
きこゆなり

第二章

みくるまの　おとにあはせて
ことほがん　いざもろともに
うちあげん　このよろこびを
もろともに
だいげんすゐへいか
ばんざい

●海軍機技官同窓婦人會　同會は、海軍機技官同窓の婦人より成りたち、以前は、毎年春秋二季に會合することなりしが、去る十一日水交社にて、同會を催したる節、以後は毎月一度づゝ、會合することゝなれりとぞ。

●傷病兵慰問　日本赤十字社篤志看護婦人會員、小松宮、北白川宮、閑院宮、小松若宮、華頂宮の各御息所殿下を始め奉り、その他十數名の貴婦人方には、去る十五日、足立軍醫總監の先導にて、かねて赤十字社内に設けられたる、陸軍豫備病院第三分院の傷病兵を御慰問あり、患者に對し、懇ろにその病状を問はれ、いづれもその恩遇に感泣せりとぞ。

●男女体格表　左の表は、明治生命保險會社の被保險中、十五歳より六十歳に至る男女の平均なりと云ふ。

	男子二万人の平均	女子二千の平均
身長	五尺二寸	四尺八寸二分
体量	十四貫〇六十七匁	十二貫三百四匁
胸廓の周圍	二尺七寸八分	二尺六寸七分
前後胸廓の徑	六寸二分	五寸九分
胸廓の横徑	八寸三分	七寸九分
活量	三千〇十二立方仙迷	三千二百八十四立方仙迷
呼吸の數（一分時間）	十九	二十
脈搏の數（一分時間）	七十四	七十七
腹圍	二尺四寸一分	二尺三寸二分

●臺灣の風俗　島中蠻族の家屋は、南洋諸蠻族の居住にひとしく、之を家屋といはんよりは、堀立小屋と名づくべし、唯、蟲類の群り來る爲め、之を防がんとて、床を三四尺高めたるのみ、衣服は腰部に天竺木綿、又は日本木綿を纏ひ、稍々上等なる婦人は、風呂敷大の綿布の中央に、首を入るべき

穴を穿ち、之を頭より被りて、身躰を覆ふといふ。

●美擧　毛利、近衛の公爵夫人をはじめ、鍋島、蜂須賀、黒田、三條、伊藤、戸田、西鄕、川村、佐佐木、仁禮、秋元、土方、花房、末松等の貴婦人方には、先日桐箱入コップ八個を負傷士官へ、水呑八百十九個を下士官以下へ配與したる旨、陸軍豫備病院に願ひ出でられたり。

●敎育大會　去る二十三日より、京都にて開かる敎育大會の、女子敎育に關する問題を、列擧すれど。

第一　高等女學校に於ては自活的技能を授くるを主とすべきか將た內助的婦人を養成するを主とすべきか

第二　女子の體育は如何なる方法に依るを以て最、適當なりとするか

第三　女生徒の體操科受持は男敎員女敎員何を適當とすべきか

第四　高等女學校に於て漢文を併せて課すると課せざるとは讀書力及作文力を養ふに差異なきか如何

第五　高等女學校に於て漢文科を置くときは第何年級より課するを適當とするや

●鹿兒島縣大島の風俗　同島土人の風俗なりとて、某雜誌に記載するもの、中、女子に關するものを抄錄せん。

人民至りて質樸にして、知識なく、女子は殊に然り、中には我が居村の外に、又世界有るを知らざるものあり、從來內地と交通せざることなれむ、亦止むを得ざる次第なり、一般に女子は勞働し、男子は佚樂す、即、女子は日々機織、耕耘に從事し、男子は唯圍碁彈絃に耽るのみ、概して云へは、懶惰にして進取の氣象に乏しく、隨て忍耐力に渉し、婦人の服裝は平袖にして、袂の短きものを着、內地の筒袋に似たり、且、常に三尺帶を結ぶ、帶の上等は唐縮緬にして、冠

婚等の儀式にあらざれば用ゐず、其頭髪は、推髻にして内地の束髪に彷彿たり、皆、銀製の長き竿を指す、髪の毛は黒くして長く且多し、又、一般に手の甲に黥す、其形紋畫の如し、即、内地人の涅齒と其趣を同くすといふ、現今官廳より之を嚴禁すと雖も、往々之を犯すものあり、弊習の久しき歎ずべきなり。婦人の物品を運搬するや、必、頭上に戴く、水桶肥料桶皆然り、雨天にも傘を用ゐるものなし、跣足を以て常とす。早婚の俗に至りては、尤、甚し、男子十五六歳にして妻帶せざるもの、殆、稀なり。而して妻の夫より年長なるを以て常とす、家に喪あるときは、親戚故舊相集りて泣哭す。之を葬るに當りても、道路聲を放ちて泣く、其聲遠近に徹す。喪ある家は、往々善く泣く者を雇ふといふ。蓋、泣者の多きを以て誇るなり。居民夏は男女となく海水に浴するも、冬期は入湯せず。總て物價を定むるに、通貨を以てせず、砂糖幾斤、米幾斤を以て標準を定め、取引を爲せり云々。

●文部大臣の演説　去にし二十日、西園寺文部大臣は、各地より集へる高等學校長尋常師範學校長を其官邸にまねき、教育の事につきて。いろ〳〵演説せられけるが、そがなかに女子教育のことにつきて、ねもごろに言はれけるは、善良なる國民を養はんには、かならず、婦人内助の力を假らざるべからず。西洋諸國に於て、女子教育にいとも力を用ゐるは、これが爲なり。女子自も亦充分の教育を受けて、天賦の良智良能を發達せしむるは當

然の事なり。わが國に於てもよくこの事に注意せざるべからず云々と。

●大日本私立衛生會　同會第十三回總會は、去月二十四日、芝公園彌生館に開かる。來會者百五十名ばかり、高木友枝氏が衛生上に關する報告、三浦安氏が衛生會の隆盛を祝する演說、緒方醫學博士が天然痘及び種痘の病源たる蟲類に就ての說明、長谷川泰氏が虎病豫防に就て府知事に望むとの演說、坪井次郎氏が海外衛生上の景況報告、其外二三の演說あり、終りて三緣亭に懇親會を開きたりと云ふ。

●日用百科全書第一　和洋禮式　全　博文館發行

此の書は、和洋の諸禮式を蒐めて、平易流暢なる文章もて說き示し、其の挿畫さへ多けれど、その興味を添へたる所尠からずといひつべし。

●注意　こは孃等が、月々送り越したまふ、兼題につきてなり。兼題の〆切は、發行日より、一週間前に、本社に屆けらるゝことは、豫ねて孃等の知らるゝ所なり。然るに、近頃往々、原稿到着の遲るゝために、可惜玉の如きものを、登載すことを得ざるは、記者の最も遺憾に耐へざる所なり。わはれ、この後は、〆切の日を違へず。記者をして、此の遺憾なからしめられんころ、願はしけれ。

教の庭

六月五日兼題　聞水鶏

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天

契りつゝ人待つころはいくたびか
たゝく水鶏にはかられにけり
東京日本橋區村松町四十七番地　舘脇萬壽子

地

世にとはきくさの庵をたづね來て
たゝく水鶏のこゑぞうれしき
神奈川縣横濱長住町官舎　千賀しげ子

人

訪ふ人もなき柴の戸とざりながら
たゝく水鶏にはかられにけり
山梨縣甲府市山田町　名取正代

うは玉の闇にもそれとたつぬ來て
たゝく水鶏のおとぞきこゆる
安井龜子

あやめ草かりねの夢をさませとや
たゝくくひなの音ぞかりする
住山せの子

みづまさる五月のあめの小夜中に
たゝく水鶏のこゑぞさびしき
住山幾子

かつら川つきの行方のあとたねて
たゝく水鶏のこゑひゝくなり
住山静子

さ苗とる竹田のさとのゆふつきに
こゑもすゞしく水鶏なくなり
永井さい子

明やすき夏の夜ころのまきの戸を
いかで水鶏のまたたゝくらん
磯部つや子

腹たゞし友のおとづれまつほどに
人まどはせにたゞくくひなは
雄井信子

さよふけて何を水鶏のたゝくらん
やどもさだめず月にうかれて
碓井武子

人はこてあたらふけゆく月の夜に　梶井 久子
たゝく水鷄ぞこゝろあるらん

水鷄にはよもはかられじ槇の戶も　吾妻ちか子
さゝでひとまつ宿としらずや

夜もすがらたゝく水鷄の音つれに　松浦 糸子
ゆめもむすばぬあかつきの床

みじか夜に見はてぬ夢を又さらに　諸井久良子
さませとたゝく水鷄なるらむ

夜もすがらたゝく水鷄の音つれも　伊賀なを子
明れど見えずいつちゆきけむ

天の戶のあくるもまたで柴の戶を　池谷らん子
たかためたゝく水鷄なるらむ

ゆふつきの影まちをれどわが門に　諏訪 晴子
くひなの聲のちかくきこゆる

ふけ行けど小川の流れとすみて　毛受 重子
閨の戶ちかくくひななくなり

夕月のかげはあかぬにかたぶきて　師岡千代子
外面の小田にくひななくなり

人傳に聞きしにましてかなしきは　南 淑子
あけてれとせぬ水鷄なりけり

のがれすむ槇の板戶をいまさらに　師岡須賀子
何あけよとかくひななくなり

しばの戶をさしゝまもなく夕暮に　羽田三緒子
たゝくときくは水鷄なりけり

みじか夜のつきさす窓に水鷄なく　平野 君子
竹田のさとのありあけのころ

あけがたに近きぬらんしばの戶を　花山 保江
たゝくくひなのおとぞ聞ゆる

小夜ふけて里やわびしく思ふらん　花山 操
柴の戶ちかくくひな鳴くなり

走り出のかど田の早苗とり〲の　佐々有鄰子
つゆの小とこにくひな啼なり

出てゝ見れど訪にし人の影もなし　川瀬しげ子
門田のあしにくひななきけん

淺澤のすゞしきつきにうかれてや　川瀬喜久子
あかつきかけて水鷄なくらむ

人とはぬ柴のいほりもなつの夜は　遠山たゞ子
たゝくくひなを友としてきく

槇の戸もとざゝでねむる夏の夜は
まくらちかくも聞く水雞かな　松下よし子

待わびし人にはあらでこよひまた
板戸を訪ふはくひなゝりけり　中村なか子

我まちし友や訪はぬとまきの戸を
あくれぞたゝく水雞なりけり　中村つき子

れとつるゝ人もまれなる槇の戸を
夜ふかくなきて訪ふ水雞かな　清水きよ子

人訪はぬ柴の戸はみをよもすがら
たゝくは里のくひなゝりけり　佐治　房子

夕されはかど田の水雞れとづれて
たゝくもさびしさみだれの頃　樋口のぶ子

みしか夜の夢もみはてず柴の戸を
しば〴〵とふは水雞なりけり　河野　文子

さゝてねし柴の折戸ををり〳〵に
たゝくはよはの水雞なりけり　大竹　治子

月みんととざゝぬ宿のまどの戸を
またぬ水雞のさてたゝくかな　高野　辰子

短さをかこつはひとのこゝろとも
しらて水雞の戸をたゝくらん　神田くに子

夕くれのつきまち居れは稻の葉に
露みだそめてくひななくなり　太田　貞子

とひ顔に夜は水雞のたゝくかな
あさゞは水のすみのかりいほ　田邊かね子

人とはぬまきの板戸をよな〳〵に
たゝく水雞のれとぞうれしき　青木　春子

せきいりし庭のやり水つたへきて
窓の戸ちかくくひなゝくなり　植木　鋼子

夏の夜のふくるも知らてわが門を
たゝく音こそくひななりけれ　村田あい子

根芹つむさとのわらべの聲やみて
野澤のみづにくひななくなり　松尾　薫子

世の中をしのびて住める柴の戸に
たれにきけとかくひな鳴らん　林　久子

舟よびてやすらひをれは計らずも
あしもと近かく水雞鳴くなり　内田はる子

たゝく戸は水鷄なるらんわが宿の
かともる犬もさわかさりけり　内田たけ子

月きよき小川のみねをよるゆけむ　久松せい子
　みくさかくれに水雞鳴くなり

小夜ふけてたゝく水雞の哀れさを　薬師寺芳子
　老のねさめのともこそ聞け

五月廿日兼題　春日局

八　大阪市北區相生町　梶井　久子

身をつゝしみ心を盡して上につかへまたよく其下をあはれび深く國体を重んじて永く泰平の基を定められしは徳川の三代將軍家光公に如くはなし去かして此君をかゝる名臣良將とはしたてたるは春日の局其人なりあゝ此局よ女のむねとあるべき道はいふに及ばすよろづの事にいたり深く其家に在りてはま心をもて夫に仕へよく女の道を守り子を教ふるには其愛に溺るゝ事なくよく其むねを得たり慶長九年はじめて御乳母となりしよりわきて自らをつゝしみかりそめの御戯にも心を用ひずといふ事なく文を崇び武を勵ましあはれ天下の良將となりたまへかしと心をくだき身をつくして仕へ奉りしかば竹千代君にはいと賢くおひたちたまひはやく武將の風備はり威儀正しくしてみだりにをかすべからざりきとぞさるに斯る御有様をいぶせく思ふさがなものやいひたりけん此君は御母ぎみに寵を失ひたまへり御世繼は弟君にやなどとさわぎしかば局は心も心ならで事を伊勢詣によせて身ひとつするがにたちこゑつてをもて家康公にかくと歎き申しけり故に公折にふれて嫡庶の禮を正し人の心を定めたまひきこれ亦局の力にあらざらんやあゝ家光公いかにかしこく生れたまひぬとももかゝる賢女のこれを教ふる無かりせばいかで文武の名臣たる事を得ん古今の良將たる事を得んまたいかに總明にをひたちたまひぬとも御世繼かはりていたづらに日かげに老いくちたまはんにはいかで邪教を拒ぎ民をあはれび永く泰平の基を定むる事を得ん實に將軍の功は春日のいさほしなり此局ありてこそ此將軍ありしなれあゝ慕はしの春日やなつかしの賢女や

佐々有鄰子

春日局は名を福といへり齋藤氏の女にて稻葉正成に嫁て三人の男をうめり正成の離別をえて徳川家に仕へ竹千代の乳母となりぬ局の行爲世にきこえたるもの少からずといへどもことに稱揚すべきは竹千代を守り立て將軍職を全からしめしにあり此の行は實に女丈夫といふべし其他の美事は此の右にいづるものはあるべからずいよ〳〵乳母の職をつくしてこそたふとけれ

名取　正代

冬の霜夜の木枯に松柏のみどりはあらはれ世に變ある折にこそ人の操はあらはるれむかしあやしき里にすまひせる女ありけり其さが世のつねならずいとかしこかりければ徳川家三代の若君の御乳母にとて召出され名をば春日局と給ひけり局はいとまめやかにかしづきまつりて或は物學のわざ將武士の藝など何くれとなくをしへまゐらせけり此頃ひが心なるものどもあまた家につかへていつかな折もあらば徳川の家の亂をかもさんとぞ企てぬるさるを局はいとかひ〳〵しくかしづきまつりければひがものどもねたましくおもひ局をなきものにせんとしはては若君をもいとうと〳〵しうあしらひまつりぬされど局が日夜かしづきまつるにいかでさるひがものゝねらふべきひまあらんややがて世に立ち給ひてあはれ名君と世にたゝへられしもまたく局が幾月日竹のみどりの千代かけて君がさかえをいのりし赤心にこそあれつぎて局は姫君の御母代となり二位に叙せられき後局が夫をも召出すべき樣上意ありければその由局より申おくりぬるに夫なる人これを見て上意の程はかしこかれど女子の手引もて立身せん事武士のはづるところなればとて直に文もて局が許に離別をぞいひこしぬる局はいと絶えいるばかりにかなしみていかゞはせん女と生れて夫に捨てられんはいともはづべき事の限りなり君の命はかしこかれどかゝるはかなき身となりては二位の位は高くとも玉のうてなは貴くとも何かせんたゞ故郷の柴の戸にひたすら夫にかしづき子を育てんこそ女の道の本意なれとぞ

なげきける當て貧きを忘れ貴くして賤きを忘るゝはなべての世のならひなるを實に局がごときはろのまごゝろの操あはれ賢女のかゞみとはいひつべし

青木　春子

あれにあれもめにもめにし元龜天正の後よく國を治め民を和けて世は大平を謳ふ春となし給ひしは德川三代將軍家光公にぞあなる公は將軍の職を襲ぎてより仁慈の政を布きて民の塗炭を除きしかど堯舜の代とは斯る時を云ふらむと人々のよろこび合へるぞ道理なりける德川の流れ十五代にわたり三百餘年の久しきさかえを保ちしも只だ公が露のめぐみぞかしこのかしこきこのめでたき公をそだて奉りしは春日局にぞあるされど御代の安らけく治まりて末ながくさかえしは全く局の力と云ふも過稱にはあらざるべし

春日局は稻葉某の妻にて世に才德の譽れ高く召れて家光公の乳母となりしより家を忘れ子を忘れひたすら公に心をくだき公の病におのが命をさゝげて神に祈りしこと公の爲めに都へ使せしことそのいさをいと多しあるは肉身の子を重く用ゐんとのたまひしをかたくいなみたりしこと褒むるにあまりありろの心ぞへのゆかしくろの事にのぞんで雄雄しくろの君に仕ふるさまのことなるこれひじりに近き公を出し亂れし國を治むるの基なりけりげにや春日野に盛りしふぢはかまかれての後も香ににほふぞいとゆかしいとめでたきや

君がためたてしいさをは名におへる
かすかの岡にのこりこそすれ

降田　槇子

流れも遠き德川の礎をかため給ひし第三代將軍家光公の賢明におはせし事は誰も知る所なりこれ其性質のさとくおはしゝによるとは云へどまた幼きをりの敎育の力によれること多きぞかし此君は幼名を竹千代君と申しろの乳母を春日局と云へり此局は齋藤利三の女にして稻葉正成の妻なりしが乳母となりてよりはひたすら心をつくしてまめやかに養育しまゐらせたり竹千代君の弟に國松君と申

すがたはしけるを御母君のいといたくかしづき給ひけれど其勢おのづから强くやがて世嗣の君にとたゝせられなんさまに見えけれど春日いたく患ひ事によせ伊勢へ詣づるゆるしを得其ついで駿河に立ち寄りて家康公に其よしを告げまゐらせつひに竹千代君をして將軍の御あとをつがしめたりされより此君の勢朝日の昇るが如くなれりとぞこれひとへに局の力なりけり其後はなほ御敎育を怠たらず此君の爲めに力をつくせり或時家光公病になやみ給ひしかど局れのが身をもてかはらんことを神に祈りたりとぞ其忠勤の深きこと知るべしまた女房達の取りしまりとなり常にろをなしへ導くなど君につかふる道のみならず女の道にも深く心を用ゐしとかやげに有り難き賢女にころされど今に至るまで春日局とて世にかくれなく人々にめではやされぬいかにたをやめなれどとて出でゝ君に事ふる時はかゝる心懸あらまほしく家にありて親夫に事るにもまたおのが身をすてゝろが爲につくすといふ心得こそあらまほしけれ



兼題

六月廿日
歌……………夏夜
文……………暑中見舞の文

七月五日
歌……………蓮
文……………靈祭の詞



西澤之助著

萬國公私權解 完

定價金二十五錢
郵稅金四錢

征清の一擧、忽我が邦をして、東洋の日本たらずして、世界の日本たるに至らしめたり。視よ、近時世界の新聞に、雜誌に、筆を極めて我が邦の事を論述して、日も亦足らざることを。彼等が我邦を凝視する、知るべきのみ。是、豈、偶然ならんや。嗚呼、征清の一擧、忽我が邦をして、東洋の日本たらずして、世界の日本たるに至らしめたり。今よりして然る後、列國の交際、益々繁難を加ふべく、彼此の交通、亦愈々頻屢を來すべし。況、條約改正の實施も、亦眼前に迫れるものあるをや。則、我が國民たるもの、廣く世界の情勢に鑒みて、以て國家の前途を慮らざるべからず。豈、局促自足りとして、安坐すべけんや。此の書、萬國の事例を輯蒐して、人權の正義を究め、以て我邦に採用するの公道を示し、資料正確、議論剴切、試みに之を繙とかぞ、世界の日本國民たるに於て、裨補する處なくむあらず。

三輪田眞佐子著

女子の本分 全

再版

定價金貳拾五錢
郵稅金四錢
郵券代用一割增

近者、我邦女子道德の頽敗に赴くこと、日また一日より甚し。三輪田女史、之に慨する處あり、本邦固有の道德に基きて、此の書を著し、以て我が邦の婦女子に、其の本分のある處を示さんことを期せらる。本社の一たび、之を世に公にするや、忽にして、初版を賣盡し、今や、再版の成るを告ぐ。請ふ、續々として、御注文あらんことを。

國光

本誌改良

第十卷一號

五月二十五日發行
每月二回(十日 廿五日)發行
定價一冊金拾三錢
全國無遞送料

外世界の**大勢**を察し內域中の**時務**を講し**人心**を皷舞し**士風**を激厲して日夜に倦むことなきは國光多年の志業にして現當國運の一轉と共に益々其責任の大なるを信じ**茲に本號以外の面目を一新して**一層の剴切周密を期し其の**國光**は卓拔精緻流俗の外に超然として現を規し來を啓き其の**雜錄**は雅俗幷び收めて詞易く旨遠く其の**鏡の影**は現績偉行萬人の鑑たる者を收め其の**文苑**は群芳衆彩千秋の珍たるものを採る其の**劍の光**は天下の粹を選み其の**時事**は內外の要を盡し以て庶幾くは天下同志の眷顧に副はしめんと欲す國光の益々奮勉して自ら改良を加へんとするもの豈唯之に止まらんや大方の君子幸に其微衷を諒せよ

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 國光社
(電話一九四六)

女鑑第八十六號目次

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京**新富町**郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事　○別に領收證出さず金員領收の上は直ちに女鑑を發送すべし　若強ひて領收證を要せらるゝ方は　別に證書郵送料御送附の事　○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊（三ヶ月分）	五十五錢	
十二冊（半年分）	壹圓	
全國無遞送料		

明治二十八年六月四日印刷
同　年六月五日發行

發行兼印刷人　東京京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛
編輯人　同　山根勇藏
發行所　同　（電話番號一九四六）　國光社

（印刷所　東京國光社印刷部）

（明治二十四年三月八日內務省認可）